

## 翻刻『春城日誌』（一九）

『双魚堂起居注』明治四五（大正元）年七月～二月

### 春城日誌研究会

明治一五年に東京専門学校として出発し、三五年に早稲田大学と改称した学苑は、この年に創立三〇周年の記念事業を計画していた。記念誌の刊行、諸制度の整備（校章、式服等の制定）等の計画が進められていた。

市島等の学苑関係者は、この記念事業推進に要する基金募集に取り組んでいた。特に市島は、七月には郷里の新潟に一〇日間滞在し、既に地方に力を蓄えはじめていた卒業生を糾合し協力を懇請した。広井一、川上淳一郎、上野喜永次、大沢邦太郎、杵淵義房等がこれに応じ市島と行動を共にしたのであった。

しかし、この帰省の間に明治天皇の崩御があり、学苑関係者は協議の末、記念事業を先に（大正三年）順延することと決定したのである。

この新編行のことは、七月一九日から克明に記されている。その一部を紹介してみよう。

二一日には、亀田での青雲会、教育会のための演説会が催された。市島は、同行した有賀長雄とともに講演を行った。会の終了した後、市島は、会津八一の父政次郎、吉田東伍の弟高橋義彦、山田寒山の父で篆刻家の木村竹香等と談話の機会を持った。各方面に幅広い人脈を持つ市島の交友関係がうかがえる。この日はこれで終らなかった。京都の大丸呉服店の下村正太郎と弟の昇之助が呉服店の経営建直しについて態々京都から訪れたのである。下村は、学苑

に学んでいて、以前より家業のことについて市島を通じて大隈重信に援助を依頼していたのであった。市島は、このため二時間余を費して協議をした。それらの仕事を終えて、漸く市内の行形亭に有志七〇余名を集めての懇親会に臨んだ。ここでも市島は一場の演説を行っている。旅宿に戻り、留守宅よりの来信に接し、心安まる一刻を持ったのであったが、激務の末か夜半に腹痛と下痢に襲われた。

八月に再び新潟を訪れた。長男の機、三男の芳雄の法要のための帰省であり、二男昴、三女スミ、四女ミツを伴った旅であった。

一日の朝六時三〇分に上野を発って二時間かけて柏崎に着いた。列車での長旅は、市島にとって退屈なものであったことは、これまでの記述にしばしば出てくるが、子供等にとっては逆であり、喜々として楽しんでいる様子がわかる。

翌日は新潟を経て、市島宗家及び自らの家の旧址である水原の地を訪れた。宗家の別荘のあった所は、現在天朝山という公園となっている。維新時、水原県が置かれた際、政庁が設けられた。長官として赴任した前原一誠が筆頭分家であった角市家（春城の生家）に止宿していた。幼い市島は、この英傑に愛されたという。任を終えた前原は、将来必ず一流の人にするからと、市島の父親に彼の同行を懇請したという。

もしそのことが実現していたら、萩の乱で敗れた前原と命運を共にしただろうと後に回顧している。同行した昴やスミ、ミツ等の愛児にそのことを語ったのであろう。

なお、現在の天朝山の一面に「継志園記」という石碑が建っている。これは、この年の九月に宗家主人徳次郎が市島を訪ねて来て、新潟に於ける市島一族の発展の基点ともなった旧址に、碑を建てることの相談があったことが発端となって建てられたものである。

既に徳次郎は、内藤公墓の手になる撰文を用意していた。市島はこの要請に賛成して、示された文案を漢文学の松平康国や桂湖村に校訂を依頼する等の傍ら、篆額の揮毫を前島密に、碑文の揮毫は当時の名筆家として名高い日高秩父に頼みこれを為し、翌年に碑は完成した。

市島の私的なことを続けると、この年には予ねてからの希望であった、郊外に別荘を造るということが実現した。落合の地に設けられた別荘は、後に会津八一が借用する所となり、秋艸堂の名で知られたものである。会津八一は、ここから目白文化村に移るのであったが、落合の市島別邸は、今は失われてその面影をとどめていない。

私共が「春城日誌研究会」をはじめた頃は、未だ往時の様子を偲ぶことが出来たのを記憶している。

大丸呉服店の経営再建についても、多忙中にも拘らず鋭意尽力し、一〇月には下村より京都の新店が盛況の裡に開業したとの報告を受けたのであった。

また、市島は書店三省堂の経営破綻に関しても相談を受けている。「日本百科大辞典」(全一〇巻)の編纂が重荷だったこともあって三省堂は倒産した。相談を受けた市島は、百科大辞典の編纂刊行を切離し、これを実現する目的に絞って対応することを提案した。結局、出版と書籍販売を別にする事で同社は再建されたのである。

歳末に恒例の所感を記すのが常であるが、この年は次の様な簡単な文章で終っている。

除夜家庭の宴会例の如し。本年は久一人を減し、和泉(信平)病臥来り会せず。和泉母、妻も和泉方にて年を送り、旁々家庭少数。妻は手数省けて本年の如き可なる大晦日はなしと云へり。

二女ヒサが医師杉山茂吉に嫁した。妻雪子の弟信平は結核に罹り病床にあった。看病のため新潟より上京した母親と市島の妻は、和泉宅で越年したのであった。

御大葬のため順延された創立三〇周年記念事業の前年は、こうして暮れた。学苑が飛躍する年となった大正二年、

そしてシーメンス事件など疑獄事件がからんでの藩閥政治反対運動と、その結果誕生する第二次大隈内閣が成立する前夜となった激動の年が明ける。

二〇一・九・二五 金子記

春城日誌研究会（金子宏一、酒井清、柴辻俊六、松井叶子、渡部輝子）



「継志園記」碑（新潟県水原町・天朝山公園内）

## 七月

### 一日

晴。広田より堆朱筆を購ふ。加藤万作（一六ウ）来る。名古屋の上遠野、増本ニ書を発す。上野喜永次、和田万吉ニ書を投す。美術会社川本三郎宛書簡代残金三十円遣す。内藤久寛出府ニ付小鯛蒸物を贈らる。丹呉へ久婚儀祝物之礼状を發す。北堂へ例年之通金十円郵送。下林貞雄より欣ニニ付来書あり。直ニ答ふ。昆田妻来訪。午後登校、準備委員会特別委員会ニ臨む。名古屋之増本敏三郎より来書あり。又、田島一義の書ニ接す。昆田、杉山（一七オ）より物を贈らる。夕刻、清風亭ニ校友大会ニ関し幹事を開らく。刊行会本第三回配布し来る。四時半頃激烈なる驟雨あり。

### 二日

晴。早朝、理髪師へゆく。高木方ニ到り競馬香器を獲てかへる。十一時より登校、次年度予算ニ関し理事会ニ臨む。午後より維持委員会を開く。富士保険会社より大島俊

蔵の件ニ付、内務省より図書館雑誌納本の件（一七ウ）ニ付、真島信城より真島良三郎女の婿の件ニ付来書あり。薄田貞敬より来簡あり。杉山夫婦、昆田へ行かんとて立寄。晩間、又雨あり。

### 三日

雨霽。太田為三郎、地名字典出版成功ニ付、慰労会之事ニ関し和田万吉ニ書を投す。京都、新村出ニ書を發す。小林堅三来り物を贈らる。大島俊蔵、小田島彦太郎留守宅ニ書を投す。アルバム編纂ニ付加藤万作、井口（一八オ）誠一を招き協議す。大島井弁三、杉山重義、文明協會の件ニ付来話。又、踵而高田俊雄来話。島村抱月、大阪、京都の芝居を終り来つて、其の状況を報す。十一時より家を出、英堂と会す。増本敏三郎より来書あり。今夜、大隈邸ニ学校の評議員会を開く。夜来、又雨あり。和田万吉より答書あり。田中稻城の書ニ接す。内子、歌舞伎座ニ行く。

### 四日

雨霽。中野平弥より来書あり。直ニ答ふ。和田万吉ニ復

す。内藤久寛ニ書を与ふ。万屋、前島より注文之東鑑を携へ来る。前島へ返付す。登校、校章、服飾其他の委員会を開く。学長より昨日、三井家五万円の寄付金決定の事を聞く。夕刻より坪内方ニ文芸協会幹事を開く。増本敏三郎より再度来電あり。直ニ答電を發す。滝沢収三齒科医ニ登第せりとて来訪。物を贈らる。半夜大雨あり。」

(一九オ)

#### 五日

雨霽。早朝より卒業生の答辭を添刪す。和田万吉より太田為三郎慰勞会、十日平野家ニ開会之事、通報あり。内藤久寛、石沢兵吾来訪。午後登校、本日得業式を行ふニ付、先づ案内したる寄付者ニ学校の設備を見せん為案内す。四時より得業式挙行。ハーバート大学老儒エリヲツト博士、渡辺渡来賓として演説す。今年始めて理工科得業生を出す。今日来会者殊に多<sup>(一九ウ)</sup>く会衆場に溢れ、入る能はざるもの百名ニ及ぶ。式後大隈邸に立食之饗を為す。晩間昆田文二郎来訪。

#### 六日

晴。広田来る。真島信城より祝として真綿を贈らる。松井郡治より新潟校友会之件ニ付来書あり。滝沢収三来話。午後より高木を訪ふて茶入二個を得。芝紅葉館ニ至り俱樂部創立委員会ニ臨み、終つて同所ニ校友大会を開く。」

(二〇キ)

#### 七日

晴。藤本慶祐、仏教史稿を齎らし来り示す。寺尾元彦、今川幸吉来訪。吉田半迂、道八布袋香合の模品を作り来り示す。杉山茂吉来る。吉村慎一、賀田金三郎、加福定吉より物を贈らる。校友に与へて寄付金を勧誘する長簡を草して半日を消す。博文館より廿五週年紀念品を贈らる。塩沢昌員来訪。高田を貴族院議員となすの件ニ付云々して去る。東京製版所<sup>(二〇ウ)</sup>、主人角田某、坂本嘉治馬の紹介にて来る、不遇。夜来雨あり。

#### 八日

雨霽。広田来る。赤堀、森岡格雄、種村宗八来話。赤堀より朝鮮の書簡箋、封筒を贈らる。北堂より来書あり。

大島俊蔵の返書到る。四谷銀行手形<sup>(二二百円)</sup>差かへる。名古屋の増本より校友会日取ニ付照電あり。大江乙亥門妻来る。伊予紋ニ午哺し、英堂と会す。増本ニ返電す。」

(二二オ)

#### 九日

晴。早朝、高田学長を訪ふて諸般之校務を協議す。松井郡治、小田島彦太郎ニ書を投ず。午後より坪内を訪ふて、学校の職服其他の件ニ付協議す。三省堂より近刊帝国地名字典、読史百話を贈らる。真島桂次郎より女結婚ニ付祝物を贈らる。山崎恒四郎より身上の件を云々し来る。夜に入り小田島来る。密<sup>(二二ウ)</sup>印を贈らる。」

#### 十日

曇、蒸しあつきこと甚し。大阪才賀藤吉より来書あり。会津八一より小崎藍川論画絶句を贈らる。加藤万作来訪。坂口五峰より来書あり。日清印刷会社の重役会ニ臨む。東京製版所の角田来る。午後、高木を訪ふて茶碗二個を購入。五時より日比谷平野家ニ図書館同人、地名字典の著者太田為三郎を招き慰勞会を開く。余發起人ニ代り一

場の表彰演説を為す。新潟の松井<sup>(二二オ)</sup>より校友会の日取ニ関し、電報あり。

#### 十一日

晴。真島両家へ書を發す。坂口五峰ニ答ふ。畑正吉を招き紀念章の意匠を云々す。加藤万作来る。山口大造の書ニ接す。皆な学校の徽章の意匠ニ関す。広田金松より青磁の香炉を購入。肥田野梅来る。画之脩業<sup>(二二キ)</sup>ニ就て一時間余り所思を談論しかへす。山田清作来る。和田万吉と書<sup>(二二ウ)</sup>。簡箋意匠件ニ付往復す。杉山を招き和泉を診察せしむ。今夜日本俱樂部ニ重なる在京校友を会し、基金募集の協議を為す。

#### 十二日

曇天。太田為三郎より。来書あり。吉田半迂ニ囑したる十六羅漢の陶印十六個之内四個出来。井口誠一、加藤万作を招きアルバムの意匠を協議す。河野研進、坪内大造等来る。高田学長を訪ふて出版<sup>(二三キ)</sup>部の件を協議す。本田信教、学報の件ニ付来る。午後、小閑を得て、寝ながら喜田貞吉の読史百話を読む。今夜、文芸協会々員募

集之為同人、神楽坂青陽楼ニ会して協議を為す。高橋義彦の書ニ接す。

十三日

雨。有賀長雄、賀田直治、松井郡治より来書あり。須貝正忠の訃報到る。ボストン発今井貫一の絵はかき来る。広田来る。香炉一購ふ。〔二三三〕加藤万作、徽章の意匠案を齎らし来る。午時、英堂と会す。名古屋増本より来書あり。骨董二点高木へ為持返へす。田代亮介、和泉診察の為来る。晩間塩沢昌貞、高田学長を貴族院議員とする件ニ付来話。半夜激震あり。

十四日

雨。南葵文庫より太田為三郎を星ヶ岡茶寮ニ招待ニ付案内状来る。高田学長ニ書を投じて出版部より〔二四四〕融通の事を請求す。吉田半迂、大石理円、加藤万作、大鳥井弁三、神楽江巻石来話。接客ニ倦み、女二人を拉して浅草ニ飯し、活動写真を見、晩間かへる。

十五日

晴、風。桑田春風、桑田豊蔵、井口誠一、種村宗八、橘

静二、加藤万作交々来訪。広田金松又来る。午前、接客之為忙殺せられる。出版部より二百円借入。日清生命株十株差入。大〔二四四〕鳥井、大阪へ出張ニ付、神楽江巻石、岡山県へ遊歴ニ付、数通の紹介状を与ふ。琳琅閣旧勘定の内へ五十円仕払。名古屋の増本より来電あり。直ニ答ふ。神楽坂表具屋へ幅二、表装を托す。須貝正忠死去ニ付悔状を發す。平山堂を訪ひて書画の払を為す。茶碗二個十五円也、内五円払。

十六日

小雨。今朝八時半之汽車ニ投して〔二五〇〕名古屋ニ赴く。同行坪内逍遙、島村抱月、閑屋親次、外ニ田中小太郎等車中苦熱を覚ふ。午後四時名古屋着、校友ニ迎へられ旅館丸文ニ投す。今夜、商品陳列館内ニ坪内の帰省を迎ふる市、官民の歡迎会あり。余等も招待を受けて臨む。当地には空前と云はるゝ盛会。あらゆる団体発起となれる会也。席上坂本市長歡迎の挨拶あり。坪内謝辞を陳べ、余も次で一場の演〔二五五〕説を為す。東京へ絵はかきを發す。

十七日

名古屋ニ滞在、朝来炎熱甚し。上遠野富之助を明治銀行ニ訪ひて、文芸協会の事を話す。帰宿後遽かに腹痛を感じ、下痢三、四回、腹痛益々甚しく幾んど起座ニ堪へず。一時頃迄苦痛甚しく為め、午時、新聞記者招待会ニ臨む能はず。漸くにして発熱あり。苦悶中、田中小太郎より鵜狩の〔二六〇〕香魚氷漬を贈らる。今夜急に帰宅と決し、八時十二分の汽車ニ投す。氷嚢を用意して寢台ニ眠る。夜半より漸く気分よし。

十八日

晴。七時新橋ニ着、行李を迎へるものに渡し、自分は電車にて高木方ニ立寄り、風月堂ニ朝食をしたゝめ帰宅。広井一、大久保寛の書ニ接す。不在中市村鑽次郎、和久正辰、横矢重道来訪。在〔二六六〕塩原有賀長雄より来書あり。松井郡治と電信を往復す。杉山来診、夜に入り京都下村正太郎より、電報にて明晩出京するニ付、在寓を請ふ旨申来る。終日蔭中に在り。

十九日

晴。小快。真島信城より来書あり。下村正太郎ニ返電を与ふ。広田、半迂来る。横矢重道、岡山の山陽新報に聘せられ告別の為来る。加賀幸三〔二七七〕来る。本日新潟へ同伴すべき田中穂積、急ニ差支行きかたしと申来り、代リニ行くものを物色し、金子馬治へ職員を遣す。今夕、新潟へ出発ニ付外出、物を購ひ英堂と会して帰へる。今夜八時三十分汽車にて金子馬治同行新潟へ赴く。車中炎熱甚しく、燈火ニ迷ひて入り来る小虫五月蠅、十二時を過くるも眠る能はず。軽井沢ニ至り漸く清涼を覚へ、葡萄酒壹杯を傾けて漸く眠る。〔二七〇〕

念日

五時半眠醒む。越後地各所校友の迎ふるもの多く、長岡にて広井外七、八名、来迎寺より大塚伝三郎、新津より新潟の出迎、斎藤、松井、荒川、巴等出迎。十一時十二分新潟ニ着。多数の校友ニ擁せられ篠田旅館ニ投す。有賀長雄、昨夜到着しあり。上野喜永次、新発田より来り肥田野築邨の書簡壹通、丹羽思亭伝一を贈らる。〔二八〇〕

佐藤与一、亀田より来り、亀田の青年団体の為め明日午前講演を請ふ。有賀と共に出演を約す。夕刻より鍋茶屋ニ校友大会を開く。来会者六十名、議事終り開宴、余と有賀交々席上演説を為す。郷里の校友には別して懇親のもの多く献酬ニ忙殺、十一時漸く辞して旅寓へ帰へる。天皇陛下御重態の報到る。

#### 念一日

払曉激雨あり。天明漸く霽る。朝餐後、<sup>（二八ウ）</sup>大塚伝三郎を室長ニ訪ふて基金の件を話し、栗林を訪ふ。有賀同伴腕車を駆り、亀田ニ赴き、青年会并教育会之為め小学校ニ一場の演説を為す。帰来、中野平弥、会津政次郎、高橋義彦、印刻師竹香等交々来る。二時改良座之講演会ニ臨み、一場の演説を為す。英堂より来書あり。京都の下村正太郎、同昇之助、内政問題協議の為態々京都より訪ひ来る。多忙中二時間計協議す。<sup>（二九ウ）</sup>晚間港内有志ニ招かれ行形亭ニ抵る。有志者七十名集会あり。席上一場の演説を為す。今夜、金子馬治東京へ発す。留守宅より来書あり。半夜激雨あり、雷鳴とゞろく。三時頃上廁

暴瀉一次。

#### 念二日

雨。今朝五時半、有賀帰京の途ニ就く。藤井寅一郎来訪、物を贈らる。宗家の店員佐野良太郎来訪。下村と昨日ニ引続き家政上之協議を為<sup>（二九ウ）</sup>す。杵淵義房来訪、同伴積善組合を訪ふて巡回文庫を見る。有賀、直江津より電報を發し水書にて汽車不通と報し来る。東京宅より郵便来る。松井来る。明日賛助員を行形亭へ招くに付、招待状発送を托す。書を請ふものあり。二、三紙揮毫。下村、午後五時去る。疲労を感じ客を謝して仮寝、按摩を備ふて休息す。内子ニ書を發す。<sup>（三〇オ）</sup>

#### 念三日

雨霽。新潟滞在。今朝、信水満漲、各郡出水の報、新聞紙ニ滿つ。聖上御不例漸く佳良ニ向はせらる。野沢卯市、高沢喜一郎、林静治、中野平弥、松井郡治交々来る。高沢、書を請ふ、直ニ書き与ふ。野沢ニ佐渡校友寄付金の取纏めを托す。英堂ニ書状を發す。車を驅つて十時濁川ニ到り、真島を訪はんとす。偶々真島来る。即ちやむ。

坂口五峰、巴利三郎、佐藤正十郎交々来訪。旗野<sup>（三〇ウ）</sup>養織又来る。午後、斉藤、松井、荒川、松木、巴を会し基金募集之協議を為す。坂口五峰を訪ふて北越詩話を閲し、五時より行形亭ニ早稲田大学賛助員齋藤庫吉、鍵富三作、栗林貞吉、坂口仁一郎、古閑定を招飲す。

#### 念四日

晴、夜来減水尺余。早起、扇子七、八を揮毫す。昨夜校書の囑ニ係る。桜井孝治来り物を贈らる。佐藤正十<sup>（三一オ）</sup>郎来訪。十時濁川村ニ真島を訪ふ。三兄弟共に不在。家人使を派して余の来るを報す。一時頃皆な会す。数時間快談して去る。真島より物を贈らる。今夜、南辺茶屋ニ齋藤、松井、松木、荒川、巴等と会飲す。桜井市作来訪。

#### 念五日

晴、朝来暑熱を覚ふ。大学へ發電し、伊藤正の来港を促す。真島桂次郎へ書状を發す。九時、新潟の校友と金<sup>（三二ウ）</sup>井方ニ会し紀念の撮影を為す。高沢喜一郎息高沢寿来話。十一時四十五分の汽車ニ投し長岡ニ赴く。車中

大竹貫一、赤塚啓一、真木山孟治ニ会す。午後二時長岡着、石塚方へ投す。上野喜永次、坪内雄蔵、英堂ニ書を發す。石塚と寄付名簿を取調べ、多く時間を費す。広井一、今泉鐸次郎、大塚伝三郎来話。エルジンの鑄造器を觀る。此器、義齒を作るに用ゆる者なれとも、印の鑄造ニ応用すべし。東京宅へ二通の絵はかき<sup>（三三オ）</sup>を發す。聖上の御容体昨夜来漸く御不良の報あり。痛心の極也。今夜石塚方ニ宿す。

#### 念六日

曇。伊藤正より返電来る。廿八日を経過せされば来り難しと申越す。直ニ電信と郵便を發す。大塚伝三郎より学校基金へ壹千貳百円寄付の申込あり。広井一來り寄付金運動の打合をなし、川上淳一郎ニ發電して来岡をもとむ。内田三省、<sup>（三三ウ）</sup>野本恭八郎を訪ふ。共ニ不在。新潟の松井郡治ニ書を投す。今夜、市内の校<sup>（友部）</sup>十四、五、末広亭ニ会して余を迎ふ。余、学校の近状を報し、募集の勧誘を為す。深更帰宿。半夜暴雨あり。今日東京来電の報する所、聖上の御容態益々あしく、まことに憂慮ニ堪へ

す。

#### 念七日

雨後晴。東京宅より差出したる衣類到達す。在長岡中学校友田制佐重「(三三才)」来訪、自家の訳本を携へ来り出版の事を云々す。内田三省、野本恭八郎を訪ふて話す。午後内田三省来話、北越新報近かく壱万号ニ達するニ付、其の記念号ニ載すべき談話を請ふ。即ち明治十四、五年頃の新聞紙と題し一時間余之談話を筆記せしむ。広井一來る。今夜、内田三省外、北越新報同人ニ招かれ若松と云ふ家ニ飲む。此家、長岡ニ珍らしきシヤレたる割烹店也。料理も東京風也。児女「(三三才)」より来書あり。聖上御容態小快を伝ふ。

#### 念八日

晴、日曜。広井同伴、早朝より長岡市内の寄付勧誘を試みんとて、先づ川上佐太郎を訪ふて謝礼を陳べ、覚張治平、小川清之助、目黒十郎、田村文四郎、遠藤六太郎、酒井文吉を歴訪。目黒、田村の外皆不在にて、兩人勧誘ニ応ず。新聞社ニ立寄り、石塚方へ立戻り、午餐「(三四

才)後、広井、石塚同伴、三島郡沢方村ニ遠藤六太郎を訪ふて、長時間話し寄付の快諾を得、更らに同村の田中仁四郎を訪ふて勧誘、五百円之寄付申受を得、薄暮長岡へ帰へる。聖上、愈々御大切ニ陥せらる之旨の新聞号外出づ。明日、一先づ帰京ニ決す。

#### 念九日

晴。今日午後帰京と決し、新潟の旅宿へ電話を通し荷物を取寄す。松井郡治「(三四才)」ニ帰東を報し事を托す。東京宅へ発電す。昨夜皇上崩御と御推量申上げたる処、今朝東京の特電にて未だ御崩御なき旨を確認す。新潟より荷物を持参、旅館之払を為す。広井来訪。午後二時十二分の汽車ニ投ず。列車一等を闕き、乗客車ニ溢る。偶々車中、旗野蓑織、関口泰輔ニ会す。七時半田口駅より下車、過般の水害にて鉄橋墜落、修補未だ成らず。此間汽車の聯絡を闕き、五六町徒歩して「(三五才)」汽車ニ上る。此度は一等室ニ移る。これより先き高田駅にて長岡師団長の東上ニ会し同車す。天機奉伺の為也。柏原駅ニ一時間半停車、葡萄酒一杯を傾け睡眠をつとむ。一客、車中

に入り来り、聖上、本日〇時四十三分終に崩御の事を報す。

#### 三十日

午前七時上野ニ着。直ニ帰宅。備中の原澄治より寺尾元彦を留「(三五才)」学生として、外国へ差遣之事、大原孫三郎承諾之趣通報あり。外ニ在清国巽来治郎外四、五の雜信ニ接す。英国電動発藤沢利喜太郎より絵はかき来る。増子喜一郎、旗野蓑織来訪。英堂と会す。今日市中寂寞、商店多く戸を閉して敬意を表す。高木方を訪ふて「(三三才)」の物を購ふ。新元号大正と決したる旨号外出づ。夜来強雨あり。「(三六才)」

#### 三十一日 改元大正元年七月三十一日

雨霽。政教社より先帝の事とも起稿し呉れよと書状来る。在長崎、三菱造船所石阪半治より来書あり。又、絵はかき数葉を贈らる。薄田貞敬より来書あり。石塚三郎、小田島彦太郎ニ書を投ず。京都下村正太郎より来書あり。又、白組巻反を贈らる。在監中の慶一より来書あり。和泉文三より写真を贈り来る。高田学長昨日北海道より来。

今日、大隈伯と協議の末十月の学校式典は大「(三六才)」喪ニ御遠慮申上、延期ニ内決す。寺尾元彦、大原の出資にて洋行と決し謝礼之為来訪あり。在上海、巽李軒之書到る。賀田直治妻、小兒二人を伴ふて来訪、物を贈らる。和泉文三より来書あり。久、結婚ニ付物を贈り来る。「(三七才)」

#### 八月

#### 一日

晴。朝餐前、中川愛紳と云ふ人原宏平の書状を齎らし来り、高山彦九郎日誌の断片を示す。終に購ひ入る。加藤万作、小林堅三来訪。田原栄、小田島桂香来り物を贈らる。石沢兵吾又来る。客散する後、高田学長を訪ふて校務の協議を為す。午後、閑を得、児女を伴ふて神田、上野辺ニ物を購ひ、風月堂ニ洋食を喫してかへる。晩間、小田島桂「(三七才)」香より使来り、余か所望之歌慈手沢の古銅筆筒外ニ書画を遣はさる。外ニ正金八十円、午前受取。これにて百五十円貸付之分決済す。夜来雨あり。

二日

晴。今朝八時、早稲田大学中庭ニ学苑の徒を会して、敬悼式を挙ぐ。大隈総長、赤誠満幅の演説あり。御真影を拝して式を了る。二、三の校務を処して帰へる。石沢兵吾より来<sup>レ</sup>(三ハウ)書あり。下村正太郎、備中の原澄治、小田島桂香ニ書状を發す。亀田青年会より過日往演を謝し、佐藤与一より反物を贈らる。小田島桂香より来書あり。旗野義織来訪。

三日

朝来驟雨あり、雷鳴る。広田、菊屋骨董商来る。井口、加藤来りアルバムの相談を為す。畑正吉、大隈伯肖像石膏版を齎らし来る。小久江、印刷会社の件ニ付来話。大島井<sup>レ</sup>(三ハウ)弃三、文明協会之件ニ付来話。十二時皆去る。午後、旗野義織、結婚問題ニ付来話。再度の驟雨あり。双魚書簡目錄を修め、終日家居。亀田の佐藤与一ニ反物を贈られたる礼状を發す。小田島より返書到る。

四日

朝来冷氣秋の如し。林瑛、大阪より帰京、来訪。菊屋、

堆朱の細筆を齎らし来る。出版部員山田、講義録菜の原

稿を携へ来り、指揮を請ふ。小久江、種<sup>レ</sup>(三九ウ)村、寺尾元彦来訪。英堂を見る。陽谷伯之扁額并椿山公之額面表装之為、神楽坂古沢へ為持遣る。七月廿八日上海発異李軒の書到る。稲葉君山より張名振書牘考を寄せ来る。出京中の和泉さき、今夜帰国の途ニ就く。松井郡治より来書あり。

五日

冷氣昨日よりも甚し。菊屋来る。堆朱の細筆を購ふ。遠藤敏、外国の印刷見聞を話するを聞き長時間<sup>レ</sup>(三九ウ)ニ渉る。寺尾元彦来訪。出版部員講義録菜の件ニ付来る。加賀翠溪、蘇氏印略を携帶、鑑定を請ふ。大久保寛より来書あり。午後、吉田東伍を訪ふて、逆叙国史の件を協議す。坪内逍遙を訪ひ諸般の事を話し、又文芸協会幹事会ニ臨み、晩間帰宅。下村正太郎より来書あり。在京都、関口泰輔より絵はかき数種贈らる。

六日

天候暑熱ニ復す。学長を訪ふて話す。石塚三郎より来書

「(四〇ウ)」

あり。在台灣、和泉文三より芭蕉布を贈らる。午後、児を伴ふて神田辺ニ散策、高木方ニ骨董<sup>一</sup>、三点を購ふて帰へる。原澄治より返書来る。西京丸乗組中の三浦巖より来書あり。

七日

晴。早朝より辻川武之進、菊屋、吉田半迂、湯浅俊雄、寺尾元彦、新日本記者楠田正徳交々来訪<sup>レ</sup>(四〇ウ)松井郡治、高橋義彦の郵書ニ接す。客散して後、英堂と湖畔ニ会し、伊予紋ニ晚餐を喫し夜に入り帰宅。杉山茂吉来話又、山田清作来る。

八日

晴。朝来五十嵐光彰、桂五十郎、朝倉無声、遠藤敏、加藤万作、種村宗八来訪。応接之為朝餐を廃し午時ニ至る。寺部治助、名古屋より出京来訪。高木方へ不用骨董を<sup>レ</sup>(四一ウ)為持遣す。在清国上海、巽来治郎ニ書を發す。石塚松嶺より来書あり。

九日

晴。小田島桂香へ預り之書画為持人を遣す。高田俊雄、

橘静ニ来訪。新日本記者楠田正雄、新日本之為めに新聞紙初期の談話を乞ふ。即ち二時間余談話して筆録せしむ。高橋義彦ニ書を与ふ。旗野美濃里ニ郵書を發す。夜半内子急性腸<sup>レ</sup>(四二ウ)カタルを發し苦悶天明ニ達す。

十日

晴。杉山到り内子を診し投棄して去る。新舞子発会津八一の絵はかき到る。菊屋、河野、骨董を齎らし来る。得る所なし。井口誠一、アルバム調整の件ニ付来る。午時、英堂と会す。昨日来警語の抄録を始め一小冊子を作り、署して警語錦囊と云ふ。新潟より過日同人と同写之写真到達、表具屋へ杏堂幅の箱を<sup>レ</sup>(四二ウ)注文す。

十一日

晴。伊藤正、小林堅三、吉田半迂を招き諸般の校務を処理す。吉村慎一、種村宗八来話。在熊本の赤松純一出京、来話。下村正太郎より来書あり。在別荘高田学長より来書あり。広田来訪、唐津の茶入を購ふ。久結婚ニ付、江部淳夫より来書あり。大阪毎日の角田浩々に良寛の歌集を贈る。越後の知人ニ明後日出発、帰省の<sup>レ</sup>(四三ウ)旨を



報す。

十二日

晴。山田清作来る。末女を携へて賀田金三郎を訪ひ、物を贈る。四谷の三河屋ニ嘯してかへる。永田貞三、山崎恒四郎妻を伴ふて出京、来訪物を贈らる。旗野みのりより来書あり。明日出発ニ付、半日行李を調ふ。

十三日

今朝六時三十分発上野の汽車ニ投<sup>〔四三才〕</sup>し、帰国の途ニ就く。此行、昂、澄、盈同伴。杉山茂吉夫婦見送りニ来る。白昼の車中特ニ暑熱を覚ふ。兒女は、長距離の汽車ニ乗るは面白ろしとて、一向退屈も感せず。午後六時三十分柏崎ニ着、天京ニとまる。投宿後ポツポツ雨到る。東京へ数通の絵はかきを投す。内藤久寛ニ物を贈る。長岡、石塚へ明朝ニ番発を電報す。

十四日

〔四三才〕

晴。朝餐前、内藤久寛を訪ふて話す。九時三十分汽車ニ投して発す。車中炎暑殊に甚しく、汽車例の如く徐行、午後一時新津着。森清ニ飯し、俵を僦ふて水原ニ到る。

入口より特ニ歩して兒女等ニ故郷の説明をなし、旧邸の

址、宗家の邸址等を指点し、丹治に入り小憩の上、又発

す。此間の風光旧の如くして、唯た新らしく活気つける

は、新設鉄道未だ客車を開通せされは、時々貨車の疾走<sup>〔四四才〕</sup>

する也。宗家の門前を過ぎ兒女等ニ指摘し立寄らずして車を走せ、六時芝田着、高橋屋ニ投す。明日亡児

の仏事を修めん為、今夜書状を持たせ、五十公野浄念寺

へ飛脚を遣る。差支なしとの返書来る。

十五日

晴。早起。広井、松井、吉田半迂、昆田文二郎、小林堅三へ郵書を発す。又、下女の件ニ付濁川吉川豊吉へ書状を<sup>〔四四才〕</sup>発す。萱堂へ午後行く旨發電す。下痢一次、杉山より貰らひ受けの薬を服す。八時、五十公野ニ出發す。先づ諏訪神社ニ車を停めて兒女ニ参拝させ、社殿の背後ニ設けられたる鉄道停車場を望み、車を馳せて浄念寺ニ到り、先考其他累代の墓を展し、水を浣ぎ、花を献し、亡児機三回忌、芳雄十七回忌の為に読経を乞ひ、布施五円を贈り、新発田ニ帰へる。時十一時半也。午餐

後、昂長岡へ向け発す。吾等三人は西条へ向け発す。<sup>〔四五才〕</sup>

これより西条迄一步毎ニ山に近つき風景ますく佳也。子供等喜こぶこと甚し。大桜峠の辺、特ニ下車して

摘草をしなから徒歩し、兒等の興を助く。五時西条庵室ニ着、萱堂健在。兒等家に帰へりたりとて喜こぶこと甚し。久より遣したる絵はかきニ、三葉届きあり。晚餐後

子女を伴ふて丹呉を訪ふ。老人久しく病臥之處此程漸く快方、一時間ばかり話して庵ニ帰へる。達ニ親子、画幅を齎らし来り鑑定を乞ふ。十時就寝<sup>〔四五才〕</sup>

十六日

晴。五時起床。英堂ニ書を発す。朝餐前、子女を伴ふて散策す。丹呉林吉、僧一行、上山等の墓を展す。上山は余か少年時代の手習の師、一行は萱堂所在の庵主、皆青年時代熟知の人、墓所に沿ふて郊原に出づ。こゝは余か幼年時代には、幾んど樹となき石の河原なりしか今は松樹茂りて満目鬱翠往々道を失はんとす。子女が野草を摘むを助けて帰へる。餐後達三来る。同伴、其居に到る。こゝは往年借り受けて余<sup>〔四六才〕</sup>か一家を移し居る処、

昔し余の家にて建てましたる座敷外ニ、三室は今、取毀

たれて模様、旧時と同じからず。偶々本郷の宗淳老人来る。久濶を叙して、一時間程話して別る。長岡石塚より

来書あり。丹後老人夫婦来訪あり。旧知の人々交々来訪、余ニ書画の鑑定、箱書を乞ふものあり。半日応接ニ忙殺せらる。本郷丹後ニサイダー壱打を贈る。

十七日

〔四六才〕

晴。早起。石塚ニ書を投す。又、下女の件ニ付吉川豊吉ニ書を発す。朝餐後、本郷丹後を訪ふて長時間話してかへる。康平来訪。新発田へ留め置きたる荷物到達す。村人の需ニ応じて扇面、唐紙十数を揮毫す。午後より兒女を伴ふて上山の居の辺を散策し、爺の少年時代の手習場なりと説示し、丹呉を訪ふて其の珍藏の書画を観る。明日丹呉祖母の忌日ニ付、今夕僧来りて読経、余も僧と晚餐を与にす。夜に入り丹後直<sup>〔四七才〕</sup>平来訪、長時間話す。須貝彦松母来訪、物を贈らる。松井郡治より返書到る。九時寝ニ就く。

十八日

又晴。五時半起。村人の需ニ応して扇面其他を揮毫す。  
丹呉老人の囑ニ応し幅箱六、七題署、十時ニ至り罷む。  
丹呉祖母<sup>(女)</sup>正月の仏事あり。萱堂并ニ兒女と共に行く。  
祖母は余の家の出、没後二十二年ニ相当す。偶々此忌辰ニ会し、其の席ニ列するを得たるは幸<sup>(四七ウ)</sup>と云ふべし。法要後杏所刻水滸伝人物印を観る。丹呉老人より先師肥田野竹塲翁の遺稿三冊を贈らる。午後三時萱堂ニ別を告げ、子女と共に西条を發し、五時芝田着、高はし屋ニ宿す。疲労を覚へ一浴一醉、早く臥す。

十九日

小雨。八時新発田を發す。途中新崎ニ車夫を濁川村吉川豊吉へ遣し、下女を東京へ伴ふ件ニ付云々す。先方<sup>(四八ウ)</sup>より人來り、明後日長岡迄遣す旨を答ふ。十二時過新潟ニ着。篠田旅館本店に投し、長岡へ電話を通し五時の汽車にて行く旨を報す。松木弘來訪。五時の汽車にて長岡へ赴く。石塚方ニ投宿す。松井郡治、高橋義彦、吉田半迂等の書ニ接す。東京宅より小包来る。井上辰九郎

父の訃ニ接す。

二十日

晴。井上辰九郎へ弔電を發す。大学へ電報して送金を請ふ。高橋義彦<sup>(四八ウ)</sup>ニ發電して来岡をもとむ。内子へ書を發す。兒女悠久山見物ニ行く。閑を得て竹塲先生の詩を写す。広井一來訪。名流書簡十数通を贈る。広井、近来余と趣味を同ふす。此贈を為す所以也。同伴寛張治平、小川清之助を訪ふて、学校之基金ニ付て依頼する所あり。又、渋谷善作を長岡銀行ニ訪ふて、十二時石塚宅へかへる。午後、学校より電報為替百円到達。野沢卯市、古閑定ニ書を發す。皆な学校の<sup>(四九ウ)</sup>用件ニ関す。貯蔵銀行より借入金千円の手形、廿四日期限ニ付書替の為手形同封、岡本季三へ書状を發す。又、旗野襄織ニ書を投す。

二十一日

小雨後晴。今朝、海老瀬、高橋義彦來訪。半日趣味談を為す。下女の兄此度依頼之下女を伴ひ来る。午後五時の汽車ニ投し帰東の途ニ就く。数日晴天つゞき、車中炎熱

殊に甚し。<sup>(四九ウ)</sup>

二十二日

晴。朝七時帰宅。不在中、紫安新九郎、辻寛、下村正太郎等來訪。上海發興來治郎の書状ニ通到達。新村出より來書あり。午時、英堂と会す。下村正太郎より來書あり。対片岡策を云々す。

二十三日

晴。午前中静閑を得て、双魚堂日載ニ閑語を筆し、十二時ニ至る。午後、川<sup>(五〇ウ)</sup>上淳一郎來訪。新潟古閑定より來書あり。川上同伴、目黒孝平を蠣壳町篠田旅館ニ訪ふて、基金寄付勧誘をなし、晚餐時刻、川上、目黒并ニ大阪の紫安<sup>(五〇ウ)</sup>皆議員也。目下臨時議會参列之為出京中<sup>(五一ウ)</sup>を亀島町偕樂園ニ招飲。目黒二百円出金承諾。主客酣醉夜更けてかへる。

二十四日

晴。下痢二次。本田信教來訪。高<sup>(五〇ウ)</sup>木を訪ふて骨董を見る。獲る所なくして帰へる。石塚三郎へ白縮緬袴反小包ニ差出す。表具屋より後藤伯の四字額出来ニ付届

け来る。旗野襄織廿七日結婚之事を報し来る。近江出張の桑田豐蔵より來書あり。田中唯一郎來訪。北海道募集の状況を報して去る。小雨あり。

二十五日

晴。小林堅三、吉田恵三郎を招き校務を処す。田代亮介坂口仁一郎<sup>(五一ウ)</sup>來話。踵て川上淳一郎、目黒孝平來訪ニ付同伴、早稲田大学ニ案内し、又、大隈伯を訪ふて、午時、上野の常磐華壇ニ午餐を共にす。

二十六日

晴。風。佐渡の野沢卯市より返書来る。種村宗八來話。又、加賀幸三來訪。晩間、樋口城康子家扶脇坂秀來訪。終日家居。

二十七日

<sup>(五一ウ)</sup>

晴。種村宗八来る。講義録菜の劈頭語ニ付案を授く。加賀幸三来る。北越新報記念号ニ掲載之私学勃興の論説を口授筆記せしむ。午後より閑を得て曝書旁々家蔵之書画幅を出し検す。今夕、越後保田旗野襄織結婚当日ニ付祝電を發す。

二十八日

払曉小雨あり。脇坂秀来話。図書館へ書を投して、一、二の事を処す。〔(五二才) 郷里より二、三の書状来る。山田清作、吉田半迂来訪。昨日ニ引つゝき書画の風入を為す。広井一、石塚三郎より来書あり。半迂ニ囑したる印三顆奏功、他三顆本日又囑す。〕

二十九日

晴。種村来る。市村瓊次郎又来訪。市俄古癡樋口清策の絵はかき到達。昨日ニ引つゝき書画の風入を為す。樟脳を入れ書画記を捺す。鑑賞眼漸く進み百五十余ニ及ぶ。〔(五二才) 書画幅を検し来れば、会心之者甚だ少なく興味索然たり。〕

三十日

晴。吉田東伍、昆田文二郎来訪。吉田半迂ニ囑したる三顆私印刻成る。教育新聞記者平岡繁樹来り、談話を乞ふ。私学勃興と云ふ題下ニ一時間程談して筆記せしむ。加賀幸三踵て来る。北越新報の爲め双魚堂閑語と題し余の談話を掲出する。先駆として即対〔(五三才) 面録四、五を談

話筆記せしむ。夜に入り杉山来る。斎藤俊蔵より物を贈らる。〕

三十一日

冷。吉田東伍女婿身上之件ニ付、大島井弁三文明協会の件ニ付来訪。旗野蓑織より来書あり。骨董屋一、二来る。十時頃小雨の後風吹き出づ。二十十日前日の兆也。午後無聊を覚へ高木方ニ半日骨董を見る。三点購ひ得てかへる。刊行会本全集〔(五三才) 解第一風俗見聞集第一配本し来る。〕

九月

一日

二十十日。夜来雨風烈しく、朝来庭園を檢するに草木皆無事。唯た門際の竹籬仆れ、牽牛花狼籍たり。雨風継続す。閑屋親次来訪。伊藤正、種村へ書状を發し当座の用を処す。〔(五四才) 高橋義彦の書到る。角田勤一郎、江部淳夫より来書あり。〕

二日

烈風雨収まり、天候平穩。但た暑熱、朝来甚し。吉田東伍女婿佐伯叔作、一身上之件ニ付来訪。吉田半迂又来る。文明協會事務所ニ到り、其理事会ニ臨む。午後、坪内を訪ふて文芸協會之維持ニ関する協議を遂げ、晩間家ニ歸へる。名古屋の豪商岡谷惣助次男入学の件ニ〔(五四才) 付来訪。高橋義彦より画幅表装を依頼之小包到達す。〕

三日

晴、冷。丹呉達三、中条図書館〔谷川俊三〕、在燕京巽来治郎より来書あり。学校へ一、二の書状を發し、事を処す。児を拉して神田辺散策、物を購ふ。今川小路風月堂ニ嘯し、高木方ニ立寄帰宅。〔(五五才) 〕

四日

晴。在鹿兒島寺尾元彦、二日門司より乗船、欧行の途ニ上らんとし、告別の書を寄せ来る。富山房より記者来り、明治大帝号に余の新聞紙ニ関する談話、時後れて載する能はさりしとて詫びに來り、物を贈らる。半迂より贈られたる薔花の液汁を以つて、模様を摺り込める用箋に過

日の帰省録をものして、半日の暑を忘る。勝吉来る。団子坂道具屋来る。〔(五五才) 〕

五日

曇、冷。小林堅三、神楽坂表具屋来る。表具屋ニ高橋義彦依頼之幅を示し、表具の協議を為す。高橋ニ簡す。高須梅溪より来書あり。賀田直治、明朝九時新橋着の報を得。四谷銀行貳百円手形期限ニ付、更らに六十一日期限として書替差入。半日骨董類之風入を為す。田代亮介、英堂ニ書を發す。同仁会本部より大喪奉送の件ニ付照会状来る。〔(五六才) 〕

六日

小雨、冷氣初めて秋を覺ふ。種村、小久江、山田清作、佐伯叔作、加藤万作、高須梅溪来話。表具屋古沢ニ寺崎幅の改装を托す。高橋義彦より依頼の六幅表装之為渡す。菊屋来る、先月之勘定九円相渡す。今朝、直治帰着ニ付、昂を迎へに遣る。午後、加賀幸三来る。北越新報の爲め、初対面録を談話し筆記せしむ。橘主事、又、踵て来話。斎藤俊蔵より物を贈らる。田代亮介ニ囑したる〔(五六才) 〕

岩倉具視の文書写出来、今夕、人を以つて贈り遣はさる。

#### 七日

細雨霏々。午前中下痢二次、腸部故障を覚ふ。朝来客なく無聊ニ堪へず、高木を訪ふて茶器を見る。得る所なし。午時、病後の英堂と会食して帰へる。双魚堂日載を筆し夜に入る。

#### 八日

「(五七オ)」

雨。朝餐後、高田学長を訪ふて、暑中休暇中の校務を打協す。久須美秀三郎を訪ふて、多時話して去る。帰途大雨ニ遇ふ。松本胤恭、名家手簡を売りに来る。不在中、高田俊雄来訪。校友池久吉、急病にて七日午前死去の報到る。

#### 九日

雨。昨日来陰鬱、冷氣甚しくフランク単衣を用ゆ。高田俊雄、朝倉無声、出版界記者榎谷岡「(五七ウ)」之進「(校友)」、教育新聞社の平岡繁樹来訪。広田金松より東江源鱗箱書の筆篋を購ふ。山沢俊夫より呉浚明菊之幅を購ふ。十一時より日清印刷の重役会ニ臨み、竣成の倉庫を見て、

午後二時帰宅。高橋義彦より来書あり。加藤万作、一身上の事故より図書館辞任の事を申出づ。杉山茂吉、賀田直治来訪、物を贈らる。賀田を留めて晚餐を共にし、夜に入り別る。「(五八オ)」

#### 十日

昨夜来雨風、今朝漸く平穩。池島賢造、文明協会々員募集之為越後へ赴くニ付各方面へ紹介を為す。畑正吉、松本胤恭、加賀幸三来る。加賀に初対面録を口授筆録せしむ。寺尾元彦妻来り、薩摩焼花瓶を贈らる。

#### 十一日

二百二十日。雨。今朝八時学校ニ於て始業式を兼、大喪ニつき学生ニ訓示あり。大講堂「(五八ウ)」学生を以て溢れ、入る能はさるもの多数。終つて教員を会して、大喪奉送之順序を協議し、正午、英堂と会し、夕刻より須田町宝亭ニ図書館協会の評議員会を開き、雑誌編纂の件等を協定し、九時半帰宅。赤塚啓一、出京来泊。松本胤恭の書ニ接す。

#### 十二日

雨霽。表具屋古沢を招き、高橋依頼の幅の表装裂を選択す。「(五九オ)」高山彦九郎日記つき足し、呉浚明梧竹幅の修覆を托す。今泉雄作より来書あり。松本胤恭へ書簡返却。出版部広告の件ニ付、高田俊雄来る。川上淳一郎ニ書を発す。午後より風邪を覚ふ、終日家居。加藤万作来訪。

#### 十三日

陰、冷氣甚し。本日は大葬儀当日にて、朝より市中静謐。宛から元日の朝のことし。宮城前三早稲田大「(五九ウ)」学同人、学生奉送の事は前日より予定しあり。自分も参加の筈の処、昨日より感冒に罹り殊に下痢を催し、十時間の佇立覚束なく、けふは参加を見合はせ、家居。聖影を壇上ニ安置し、家人と共に謹慎。大切なる時刻ニ礼拝す。夜半頃より殷々たる吊砲と、寺々の梵鐘の声相和して、天地囂々たり。

#### 十四日

晴、冷氣昨日の如し。今朝百万円賑恤「(六〇オ)」のため御下賜の詔勅を拝す。乃木大将、御発引の刻と共に感ずる

所あり、夫妻自殺の報を聞く。高橋義彦より大喪紀事刻印の印箋を贈り来る。近日、慶一出獄ニ付、鎌田松造を招き協議す。出版界の榎谷岡之進來訪。昨日ニ引つゝき本日御大葬当日ニ付、万民休業、余も家居謹慎、昨日と異なるなし。

#### 十五日

雨。坪内と共に半日高田方ニ会し「(六〇ウ)」て、諸般の事を協議し、午餐後去る。増田義一を実業日本社ニ訪ふて金式百円借り受け、坂口仁一郎を樋口屋ニ訪ふ。談話中増田来会あり。又、郷人平松遮那一郎も来る。相携へて中華亭ニ抵り、晚餐を与にし、放談十時、家ニ帰へる。

#### 十六日

陰。川上淳一郎を旅宿ニ訪ふて、学校基金募集等の件を協議す。「(六一オ)」登校事務を処す。<sup>(六二ウ)</sup>大原澄治ニ書を投ず。校友植松考昭の訃到る。午時、英堂と湖畔ニ会す。高木方ニ骨董を觀。夕刻、川上淳一郎と共に目黒孝平ニ両国福井楼ニ招かる。齒痛にて早く辞しかへる。高橋義彦より近刻の印箋を贈らる。

十七日

陰。吉田半迂、森岡格雄来話。高木へ使を遣し、二、三の骨董を購<sup>（六二ウ）</sup>ふ。杉山茂吉よりあぶるまの香魚を贈らる。山田清作来話。先考忌日ニ付、僧来り経を読む。午後より登校、事務を見る。賀田直治来校ニ付、校内を案内し、図書館ニ寄托の余の書翰類を見す。夕刻より賀田ニ招かれ、昆田と共に富士見軒ニ晩食を与にす、在長岡校友田制佐重より来状あり。

十八日

陰。今朝八時、校友植松考昭の葬式<sup>（六二オ）</sup>ニ臨む（小日向水道町福勝寺）。香典二円遣す。都新聞社より、明治年間の大著に付、読売新聞より、読書時間ニ付、意見を徴し来る。何れも答書を発す。本田信教来訪。又、外出中、桂湖村来訪。午後より登校。宗家主人来訪ニ付帰宅。応接、久濶を叙む。主人より、水原旧址に碑を建つる件ニ付相談あり。内藤公墓の撰文をあづかる。余、家宗を訪はさる、こゝに両三年、図らさりき。却つて宗家主人の訪問を受けんとは。<sup>（六二ウ）</sup>

十九日

晴、冷。広田金松、斎藤木、下林貞雄来る。下林と、慶一身上之件を協議す。松平康国、吉田東伍を訪ふて話す。下村正太郎、藤山銀太郎、田制佐重ニ書を発す。登校、事務を見る。本日、前島男来校之折、揮毫依頼承諾ニ付、帰宅後用紙ニ書簡を添へ、使を以つて特ニ遣す。

二十日

陰。菊地晩香ニ溪琴詩幅の箱書を依頼す。午後より登校、事務を見る。図書館へ寄托の書簡を整理す。斎藤知三の訃到る。家蔵の絵はかきアルバムを整理す。総計二十八冊約六千枚也。

二十一日

陰。広田并菊屋来る。広田より槐庵、文覚瀑布之幅を購ふ。読売記者前田弘二来り「読書の友」之ために談話を乞ふ。即座読史趣味に就て話<sup>（六三ウ）</sup>し、筆録せしむ。加藤、小林来る。館務ニつき協議す。赤塚啓一、出京来泊。登校、事務を見る。小野寺文哉ニ書を投す。斎藤知蔵死去ニ付悔状を発す。継志園之稿を松平康国へ為持遣

す。夜半より強雨あり。信平、夜半胸部疼痛、妻、走り来り医をもとむ。

二十二日

雨。越後新津発賀田直治の書到る。北越新報壹万号紀念第二号<sup>（六四オ）</sup>より、余の双魚堂閑語を掲げ始む。高橋文治、図書館之件ニ付来訪。来月より加藤万作の後任と為す件ニ付懇示し遣へす。菊屋来る。斑竹描金の筆を購ふ。桜井孝治、真島六郎来訪。桜井より物を贈らる。午時、英堂と会す。高山圭三、下村正太郎の書ニ接す。下村家の内政は、前日新潟ニ於て相談の方針通り進行。漸く片岡の羈絆を脱したる趣、通報を得たり。<sup>（六四ウ）</sup>

二十三日

秋季皇霊祭。昨夜来暴風雨にて、今朝ニ引つゝき罷ます。行路人行を絶ち、午前中戸を鎖し点火、恰かも暗夜の如し。午餐後、風の怒号少しく収まる。子女を伴ふて、落合村ニ高田弥一郎を訪ふて、昨年末購入之地を見る。旧持主宇田川、両三ヶ月前家宅を移転せりとて、今は僅かに肥料小屋を存するのみ。検分後宇田川を訪ひ、更らに

高田弥一郎方ニ立寄、帰宅。竹村良<sup>（六五ウ）</sup>貞来話。

二十四日

晴。広田、河野、半迂等来訪。半日庭園の手入を為す。下村正太郎ニ書を発す。在埼玉川越監獄慶一ニ書を発す。慶一の件ニ付、下林貞雄より来書あり。登校事務を見る。貯蔵銀行九百円手形期限ニ付、小林を遣はし、更らに六十日間手形差入る。此分田中唯一郎裏書。担保印刷株百株差入あり。<sup>（六五ウ）</sup>松平康国を訪ふ、不在。内藤公墓と云ふ人の事ニ関し村上藤山銀太郎より答書あり。高山仲縄日記巻追加、外書簡巻二巻追加表具屋へ依頼之处出来。今夜、赤塚帰国ニ托し、先頃濁川より伴ひ来る下女をかへす。

二十五日

晴。伊原青々園より、日本演劇史後篇脱稿を報じ来る。午前登校、理事会を開き学校前途之財<sup>（六六オ）</sup>。政案を議し、又、前年度決算を稽查す。午後維持員会を開き、決算其他を決す。基金経済案も提出、懸案として研究する事となる。黒川真道、伊原敏郎ニ書を投す。

二十六日

雨。有賀長雄より、十月一日誕生日の案内を受く。高木を訪ふて書画を観る。東儀鉄笛を招き食事を共にして、文芸協会の前途を談し、且つ<sup>(六六ウ)</sup> 昂の音楽研究の指導を托す。登校、事務を見る。鳩山家より、鳩山銅像を学校へ建たしとの冀望ニ対し、理事間の相談を為す。有賀ニ答ふ。佐伯救作、日清生命保険へ入社之挨拶ニ来る。

二十七日

晴。広田、吉田半迂来る。薄田貞敬来訪。物を贈らる。賀田直治、越後へ帰省之处、帰京、来訪あり。浦野熊太郎、文明協会々員募集<sup>(六七オ)</sup> 之為名古屋へ出張ニ付、紹介を求めに来訪あり。午後登校、事務を見る。晩間、英堂を見る。小田島彦太郎より来書あり、直ニ答ふ。

二十八日

晴。吉田恵三郎母、出京ニ付挨拶之為め来り、物を贈らる。学長を訪ふて、天野理事<sup>(六八ウ)</sup>を辞任したしと申出たる件ニ付協議す。登校事務を見る。加賀幸三を招き、初対面録を談話筆録せしむ。伊原敏郎、小田島の書ニ接す。石

<sup>(六七ウ)</sup> 塚三郎ニ書を投す。

二十九日

曇冷、日曜。校友安蔵吉次郎来訪。広田、菊屋、小柳善四郎、隆文館員堀江源吾、昆田文次郎交々来訪。山本利喜雄又来訪。接客ニ忙はしく午前を消す。午後、高木を訪ふて、仏画豎額を購ふ。田中稻城の書ニ接す。

三十日

<sup>(六八オ)</sup>

朝来雨あり、寒冷甚し。田中稻城来訪。学生を早稲田へ入るゝ件ニ付依頼を受く。浦野熊太郎、文明協会々員募集之為名古屋へ出張ニ付、数通の添書を与ふ。小林堅三、校用ニ関し来訪あり。丹呉老人ニ書を発す。登校、事務を見る。松平康国を訪ふて、継志園記の稿、改訂を請ふて帰る。藤山治一より、川上操六大将の書簡を贈らる。三省堂の坂巻ニ書を投す。又、田中稻城ニ書を発す。小田島桂香ニ書を発す。<sup>(六八ウ)</sup>

十月

一日

雨、霽、尚曇。山田市郎、図書館辞任の件ニ付来訪。旗野蓑織、鳥居大路恕平ニ書を発す。田中稻城の書ニ接す。登校事務を見る。島村、東儀、金子を招き、文芸協会の前途を議す。藤山茂実の書到る。直ニ答<sup>(六九オ)</sup>ふ。広井ニ書を投す。行違ひ、広井より来書あり。三省堂より、百科字典第六巻を贈り来る。有賀長雄の誕生日紀念会ニ招かれ、同人と茗荷谷之宅ニ行き、饗を受けて帰へる。

二日

雨。種村、薄田、通俗日本史中に明治史を編入の件ニ付、来訪。吉田東伍、又来る。丹呉勝吉ニ慶一の事を依頼す。慶一より書状来る。長岡の北越新報より、基金寄付を促す<sup>(六九ウ)</sup>の書状を作り、内田三省、二国万次郎、今泉鐸次郎、広井一宛発す。宮川鉄次郎子息死去ニ付、悔状を發す。山岸岩根重体ニ付、見舞品を遣す。登校、事を

処す。夕刻、出版部の経営協議のため、小久江、種村、高田俊雄を会し、数時間協議す。

三日

雨。吉田半迂来訪。近刻の印を示さる。竹村良貞来訪。帝國通信社を株<sup>(七〇オ)</sup>、式会社と改むるに付、余を發起人中ニ加へたしとの事ニ付、依頼あり。名義のみ貸す事を諾す。大島井弁三、文明協会の近状ニ付、来話あり。正午英堂と会し、食事を与にしてかへる。夜に入り、書を裁して宗家主人ニ投す。継志園碑文の事ニ関す。

四日

雨。一昨夜明進軒ニ於て協議せし、出版部の諸件ニ付、今朝出版部幹部と、高田宅へ会し、半日間<sup>(七〇ウ)</sup> 凝議す。午後、登校事務を見る。石塚三郎より来書あり。吉田東伍と倒叙国史の事を話す。閑屋親次と文芸協会の前途を議す。晩間石沢兵吾一身上之件ニ付、来談あり。小田島彦太郎の請求ニ依り、廿五円也貸付す。在京都関口泰輔より、松茸を贈らる。

五日

晴。広田金松より、韓天寿書幅外二点購ふ。万屋ニ不用書籍「セオ」売却。加賀幸三を招き、初対面録を口授筆記せしむ。薄田貞敬来訪、日本通俗全史編纂の事を協議して去る。丹呉より鮎を贈らる。午後、登校、山崎副館長と共に館員を集めて、諸般の打合を為す。

六日

晴。日曜。学生竹内茂来訪。萩野由之、小久江成一、小柳善四郎、吉田半迂等交々来話。山田清作、又、来「セウ」る。和泉文三より来書あり。午後、高木を訪ふて、三、四の茶器を得。下谷金杉ニ宗家主人を訪ふて、依囑の継志園記并ニ建碑の協議をなし、夜に入り帰宅。夜来雨あり。

七日

晴。小師橋三郎来る。賀田直治、明日帰台ニ付、告別之為来る。佐藤貞雄より来書あり。中野平弥より、母十七回忌菓子を贈らる。午後より登校、出版部ニ臨み、講義録「セオ」担当記者を会して、編輯之事を協議し、半日

を消す。

八日

晴。直治、台湾へ帰へるニ付、今朝新橋迄見送る。帰路木村桑市を訪ふて、古鏡を觀、印壺頼貫らひ受けて去る。箔屋町ニ丁字屋を訪ふて帰へる。赤塚啓一來る。午後登校、事務を見る。午後、吉田東伍を訪ふて、倒叙国史の件を話す。登校、事務を見る。内田三省より来書あり。坂「セウ」本桂治より、一括の書簡を郵送示さる。

九日

晴。坂本桂治ニ答ふ、広田金松来る。大鳥井弁三、文明協會の件ニ付来話。日清印刷の重役会ニ臨み、半日を消す。坂本桂治より書簡若干購入、代価十五円遣す。薄田貞敬より来書あり。午後、英堂を見る。夜来雨あり。「セウ」

十日

晴。吉田半迂、三條公家ニ行き、所蔵之印を見たりとて、印影数紙を贈らる。継志園碑の字割を托す。草村松雄、文明協會の件ニ付、来訪。関谷親次、文芸協會の件ニ付、

来話。在米国樋口清策より、絵はかき消息来る。登校、

出版部の事を処す。杉山重義、大鳥井弁三と会し、文明協會の件ニ付、長時間協議す。

十一日

「セウ」

曇。広田来る。小野菊、上田秋成、韓天寿、和歌の幅を購ふ。代金三十七円の内、二十二円相渡。山崎直三、丁字屋来訪。国田江東、越後人の人物評を聞きに来る。談話を筆記せしむ。午後、登校事務を見る。早稲田講演編輯会ニ臨む。三時より坪内方ニ文芸協會の幹部会を開らき、前途の経営ニ付協議す。午後より低気圧甚しく、冷氣冬の如し。病人信平、俄かに四十度の発熱あり。杉山来診。直「セウ」治の絵はかき到る。夜来雨あり。

十二日

晴。種村宗八、加賀幸三、小久江成一来訪。種村ニ吉田著倒叙国史の出版趣意書を作るニ付、案を与ふ。加賀ニ対面録を口授筆記せしむ。午後登校。図書館務を処す。夕刻より末女を伴ふて散策。浅草ニ飯して帰へる。表具屋へ書簡「セウ」二巻、韓天寿書幅一改装を托す。藤井

忠次郎来訪、物を贈らる。大鳥井弁三ニ書を投す。

十三日

晴。日曜。広田ニ托し、菰翁書幅鑑定之為、今泉へ遣る。団子坂河野来る。箱壺個購ふ。石沢兵吾より身上之事ニ付来書あり。大鳥井弁三、杉山重義、文明協會の前途ニつき、相談之為来訪。多時凝議の後去る。午後、校友山岸岩根の葬式「セウ」ニ臨む。香料二円遣す。葬式の序ニ、雜士ヶ谷小林堅三の居を訪ふ。途中高田馬場を過ぎ、某院ニ立寄、青柳文蔵之墓を拜す。三省堂の亀井忠一、越後の高橋義彦ニ書を発す。石沢一身上之件ニ付、内藤久寛を下宮比町ニ訪ふて多時話し、帰宅後、石沢ニ書状を発す。

十四日

晴。山田清作、種村宗八、室孝吉来「セウ」訪。在阪山崎恒四郎より、松茸を贈り来る。上野ニ開場の文部省主催絵画展覽会を見、午時英堂ニ会す。野田屋ニ立寄、骨董を弄して帰へる。杉山来る。

十五日

晴。広田来る。校友毛利某、坪内の紹介にて来る。小崎恭人又来訪。内藤久寛ニ書を発す。石沢より来書あり。昆田文を訪ふて、学校之基金件を話す。木村桑市を「セハオ」訪ふて話す。葉籠一割愛を請ふて帰へる。午後、登校事務を見る。三時より、文明協会幹部会を清風亭ニ開らき、会の前途を協議して、九時ニ至る。隆文館との関係、追々面倒にて、会の前途気遣はし。更らに再開を期して散す。就寝後川越監獄より、慶一出監恩赦之為早くなりたるにより、明日迎へに來れと電報来る。「セハオ」

十六日

晴。石沢兵吾、一身上の件ニ付来話。内藤より石沢の窮状ニ対し、金子入書状来る。本田信教、吉田半迂来る。三省堂の坂巻登介来訪。京都発江部淳夫の書状ニ接す。明日、恩賜館内に於て午餐会の案内、工手学校より来る。在監中の慶一より来書あり。慶一出監ニ付、丹呉勝吉を招き、処理を托す。登校事務を見る。刊行会同人と万安ニ会す。堀田璋左右、矢野太郎、黒川真道「セセオ」等來

十九日

晴。山田市郎来話。森脇美樹、文明協会々員募集之為、大阪へ赴クニ付、十数家へ紹介す。石沢兵吾の書ニ接す。大工佐藤吉五郎来る。同伴、落合村所有地ニ至「セハウ」り、小屋を営む地を叩いて帰へる。午後登校。二、三の事を処して帰へる。夜に入り「学生」記者西村真次、新年号の寄稿を請ひに來る。杉山茂吉来る。

二十日

晴。日曜。団子坂河野より、一、二の骨董を購ふ。校友毛利宮彦、図書館へ入り事務員となる件ニ付来訪。山崎直三来訪。伊藤、山県、青木周蔵の書簡を贈らる。児等と共に「セハオ」浅草ニ遊び、活動写真を見てかへる。夕刻より、温交会を上野精養軒ニ開会、出席す。小田島彦太郎より、過日用立の金二十五円返却あり。増田義一ニ過般二百円借用の処、今日壹百円也返却す。

二十一日

好晴。広田金松来る。勘定の内へ六円払。表具屋へ、書簡表具ニ巻托す。前の分共五巻也。払の内へ十円払。四

会。

十七日

晴。秋季皇靈祭。高橋義彦の書到る。広田より佐藤一斎の反故若干を購ふ。団子坂河野より小卓を購ふ。大工佐藤吉五郎を招き、落合ニ小屋を建るニ付協議す。源氏物語注釈の事ニ付、安藤直方来話。校友土井潔、渋沢某来訪。正午登校。恩賜記念館内に於て、工手学校教職員と食事を与にす。「セセオ」平山堂を訪ふて、名家書簡を購ふ。慶一恩赦ニ遇ふて出獄ニ付、勝吉を埼玉県川越の幼年監ニ遣り、連れかへり、直ちに救世軍へ引渡す。石沢兵吾より来書あり。

十八日

晴。種村宗八、石沢兵吾来訪。高木方へ返却品を為持遣る。午後、木村桑市を訪ふて、近來蒐集之和漢の古鏡を觀る。其数三百面、盛んなりと云ふへし。同伴「セハオ」の半迂をして、十数枚を撫せしめ持ち帰へる。今夜、土佐の校友岡崎賢次を松物町ニ招飲。昆田、小林豊太郎、木村桑市來会。十時帰寓。八時頃地震あり。

谷の黒田太久馬方を訪ふて、支那の発「セハウ」掘物を觀る。五、七点購ひ入る。丹呉勝吉来る。慶一の事を依頼す。午後登校、事務を見る。内藤久寛、高橋義彦、内田三省、広井一ニ書を發す。旗野襄織より、信平病氣医薬料二十円封入之書状達す。江戸川畔ニ、飛行機の飛揚を見る。孔子誕生会より案内状来る。

二十二日

晴。早朝、赤堀又次郎來り、豊太閣書簡三卷、唐經一帖を示さる。山田清「ハ〇オ」作、菊屋、種村来る。種村ニ倒叙国史出版の趣意書案を口授筆記せしむ。京都の宮原正喬より、松茸一籠を贈らる。堀成之より、近代思想社記者大杉栄を紹介し来る。同人より、余宛紅葉の書簡一通を贈らる。午後登校。越佐会幹事と会談す。宇田川重蔵、宮原正喬ニ書を發す。真島信城より、越後味噌を送り出したる旨、通報あり。和泉信平漸々重態ニ陥り、看護上、母の必要「ハ〇ウ」を感じ、本日、国元へ書状を發し、其の出京を請ふ。



二十三日

曇、冷。平山堂を訪ふて書画を見る。増田義一へ残金百円、為持返却。午後、登校事務を見る。恩賜館内貴賓室の装飾ニ多時を要す。薄暮、湖畔ニ英堂と会す。

二十四日

晴。石沢兵吾より来書あり。紫安<sup>（ハ一オ）</sup> 新九郎、竹村良貞、大工佐藤吉五郎、菊屋等交々来る。佐藤、落合ニ作らんとする家屋の図面を持参。来三十日紅葉館ニ於て、紅葉山人十回忌案内来る。午後、登校事務を見る。新発田高橋屋より、かねて依頼し置ける、五十公野宅地候補を申越しあり。高橋義彦より来書あり。表具屋へ孤村、田辺玄々小品二幅、表装依頼。高木を訪ふ、得る所なし。不在中、草村松雄来訪あり。<sup>（ハ一ウ）</sup>

二十五日

雨。石沢兵吾へ書を投す。石沢の件ニ付、内藤久寛より答書来る。午後登校。出版部の編輯会ニ臨む。高橋義彦より、幅の表装代六十円送り来る。

二十六日

晴。広田来る。同人ニ托し、大雅堂幅外雲華幅、今泉ニ鑑定を求む。畑正吉来り、大隈伯肖像の鋼鉄版を示さる。新日本の西村真次来り<sup>（ハ一オ）</sup>、学生新年号ニ余の日記ニ関する談話を請ふ。即ち話して筆録せしむ。広田ニ書画代七円払。真島信城より来書あり。午後より、上野ニ散策。拓植<sup>（マ）</sup>博覧会を見る。高木方ニ立寄、黒塗冠台を購入。京都下村正太郎より来書あり。新築開業の盛況を報し来る。魚形飛行船、家園之中天を飛揚経過す。

二十七日

<sup>（ハ二ウ）</sup>

晴。和泉母今朝着京。高木方へ使を遣し、不用の骨董返却。冠台購入。平山堂を訪ふて、紀梅亭淹之幅を購入。石沢兵吾ニ書を投す。内藤久寛より来書あり。午時、英堂と会す。沢海伊藤弟伊藤成治、会津八一の紹介にて来訪。毛利宮彦来訪、物を贈らる。晩間、昆田来訪、古河基金寄付の件ニ付云々す。水原発宗家主人の書到る。碑文の事ニ関す。賀田直治より来書あり。南葵文庫の橘<sup>（ハ三オ）</sup> 井清五郎ニ簡し、紀梅亭の履歴を問ふ。

二十八日

曇。奥村宇兵衛、一身上の件ニ付、来話。石沢兵吾、小久江成一、吉田半迁来訪。菊屋、秋月古香の画幅を齎らし来る。価二十七円。購入代価即済。午後、三省堂の亀井忠一、斉藤精輔来訪。破産善後策ニ付云々の談あり。登校事務を処す。来年一月十三日満期の定期預金<sup>（ハ三ウ）</sup> 千円を出版部へ差入、金巻千円借受く。夏中出版部より、日清印刷株十、担保として借入り之貳百円、返金株券引取。今夜有楽座付属東洋軒ニ於て、文芸協会評議員会を開らき、緊要の事を協議す。夜来雨あり。内藤久寛、下村正太郎ニ書を投す。

二十九日

雨。西川太治郎、伊藤成治、三国市平ニ書を投す。吉田半迁、継志園碑の字割を作り来る。宗家ニ書を投<sup>（ハ四オ）</sup>す。又、碑の字割を郵送す。大工佐藤吉五郎来る。三省堂の斉藤方を訪ふて、復活案を協議す。博物館の紀淑雄へ画幅二、為持遣し、館の鑑定を請ふ。登校事務を見る。亡弟遺子三郎丹呉勝吉、戸籍を移す件ニ付来る。

三十一日

雨。山崎直三へ使を遣り、書簡帖返却。物を贈る。石沢へ、内藤より預り金貳百円渡す。桂湖邨ニ書を投す。英堂と湖畔ニ会す。平山堂を訪ふて、夕刻迄書画を見る。書簡若干通購ふ。帰宅後、紀梅亭年令ニ関し、大津西川太治郎の答書を得。不在中、松平康国来訪。<sup>（ハ五ウ）</sup>

十一月

一日

雨。橋本弘、渡辺出版部の件ニ付来訪。広田金松ニ托し、三、四の幅を今泉へ遣し、審定をもとむ。表具屋ニ奥平謙輔之書四幅、林檎宇之幅、改装を依頼す。本田信教、山崎直三交々来訪あり。名古屋の堀田璋左右より来書あり。昆田夫人来訪。物を贈らる。登校事務を見る。松平康国より来書あり。不在中、石沢兵吾<sup>（ハハオ）</sup>来訪。夜来大雨あり。

二日

雨やむ。広田来る。今泉ニ書画数幅鑑定を請ひたる結果を告ぐ。加能作治郎来り、早稲田講演之事を云々す。平山堂ニ至り、書画を購ふ。書画代之内、三十円払。午後、高木を訪ふて二十円払。帝国図書館ニ開きたる、図書館協会総会ニ臨み、夜に入り帰宅。表具屋へ書簡ニ巻表装を託す。宗家よ<sup>（ハハウ）</sup>り、継志園碑石の事ニ付、来書あり。

三日

晴。先帝天長節ニ付休業。高木方へ不用品若干為持遣り、箱二ツ購ふ。表具屋へ托し置ける書簡巻二出来。四谷平山堂を訪ふて、書簡を漁り、若干を得。別に平卓一を購ふ。不在中、朝倉亀、伊藤成治来る。午後より末女を携へ、拓<sup>（くわく）</sup>博覧会を見、宝亭ニ飯してかへる。高橋義彦より生鮭を贈らる。<sup>（ハセオ）</sup>高橋義彦ニ簡す。山田清作ニ書を投す。杉山より菊花を贈らる。

四日

晴。昆田を訪ふて、学校之要件を話す。三省堂の斉藤精輔来訪。破綻後の状況を報す。広田、種村来る。吉田半迂、倒叙日本史表紙之意匠を齎らし来り見す。午後、登校事務を見る。金貳百円四谷銀行へ返金。手形引取。吉田東伍著倒叙国史出版趣意書を校す。三時<sup>（ハセウ）</sup>より桂湖村を、小石川林町の居ニ訪ふて、継志園碑背の撰文を托し、携ふる所の書画を共ニ展観し、夜に入り帰宅。夜来雨あり。

五日

雨、霽。高田学長同伴、大隈伯を訪ふて、朝吹英次の来るを待ち、三井家重役ニ、寄付金募集の件を協議し、終つて伯より、三省堂破綻<sup>（たふ）</sup>善後の周旋を朝吹ニ依頼あり。余より、三省堂之為め、<sup>（ハハオ）</sup>善後<sup>（マ）</sup>の方法は、百科字典を引放し、之を出版する目的を以つて、銀行側の債権者を糾合し、完成を遂げて、一面此業を完ふし、一面此の方面の債務を果すの外なきを説く。朝吹も同感にて、或る時機を見て、援助を約す。偶々三省堂の坂巻来り、昨夜の調査会ニ付、報告する所あり。午餐の饗を受け、午後、坂巻と学校ニ協議し、三時過、四谷平山堂を訪ふて帰宅。外出中、西<sup>（ハハウ）</sup>村真治来訪。又、大江乙亥門来訪あり。

六日

晴。吉田半迂、山田清作来る。山田、刊行会員募集之為、京阪へ出張ニ付、各方面へ紹介す。大工佐藤吉五郎、落合に構へんとする小屋の設計書を持参、二十七坪余にて千六百五十円也。登校事務を処す。平山堂ニ抵り、平卓

七日

晴。早朝高田を訪ふて、大隈伯外交史出版の件を協議す。日清印刷会社の重役会ニ臨む。正午、増田義一を交詢社ニ訪ひ、食事を共にして、三省堂之事を話す。木村糸市を訪ふて、落合ニ経営せんとする家屋の件ニ付、協議し、去つて英堂と湖畔ニ会し、<sup>（ハハウ）</sup>夕刻帰宅。外交史の件ニ付、有賀と電話を交換す。表具屋より、高橋義彦依頼之幅六、并ニ余の分二、三幅出来ニ付、持ち来る。今日成規の大掃除を行ふ。妙義山癸石塚松籙の絵はかき来る。

八日

晴。長岡の河上、広井、加賀<sup>（幸三）</sup>来訪。北越新報吉万号の記念品を贈らる。大隈伯著外交大<sup>（九〇オ）</sup>勢史論出版ニ関し、種村、小久江を招き、協議す。赤堀又次郎、大石理円、広田金松来る。坂巻登介、三省堂破綻整理の経過を云々す。終ニ三省堂編輯所ニ至り凝議。半日を費

し、晚景帰宅。大工佐藤吉五郎来訪。夜に入り、石塚三郎来訪。長時間話して去る。

#### 九日

晴。高橋義彦ニ書を投す。稲葉君山来訪。清朝史著述の件ニ「九〇〇」付、云々之談あり。平山堂ニ至り、春畝公の遺墨一巻を購ふ。登校事務を見る。三時より神楽坂常磐亭ニ、講義録編輯会を開らき、終つて出版部の職員会を開らき、解職せる商科講義の担任者兩人之為送別会を開く。奈良出先より高田早苗の書到る。

#### 十日

日曜。晴。大鳥井、文明協会の件ニ付「九一〇」来話。越佐会幹事、倶楽部の件ニ付来訪。朝倉無声、菊屋来訪。石塚三郎ニ物を贈る。午後より末女を拉して、浅草ニ遊び、活動写真を見、金田ニ飯し夜に入り帰宅。

#### 十一日

晴。山崎直三、竹内茂来訪。種村、小久江を招き、大隈伯著外交大勢史論出版の協議を為す。十一時登校。図書館ニ於て会議を開く。二時より文明協会事務所ニ至り、

（九一〇）協会と隆文館との約束の変更、并ニ前途之予算を協定す。杉山、草村、大鳥居来会、決定書ニ署名調印す。夜に入り三省堂の斉藤、神保、坂巻外二人、整理の難関に困しみ相談之為めに来り凝議。長時間ニ涉りて去る。昆田文来訪。

#### 十二日

晴。種村来り、吉田の倒叙国史広告文案ニ付指図を需む。文章を訂正してかへす。富山房学生雑誌「九一五」主任記者、新年号ニ余の日記ニ関する説ニ合はせて、名家日誌を写真ニ撮らんことをもとむ。即ち高山彦九郎、種彦、華山を出して撮らしむ。高木を訪ふて、仏像一を購ひ、英堂と会し、共ニ出て、日本橋辺ニ物を購ふて帰へる。大阪の中井新三郎より来書あり。吉田半迂来話。高木勘定の内へ十円入。

#### 十三日

晴。種村、倒叙国史広告の件ニ付「九二〇」来訪。熟考之末、不景気年末の折柄、出版の時にあらずとなし、来年迄延期の事ニ決し、明日高田出先へ、種邨を遣す事ニ決

す。三省堂件ニ付、坂巻登介来る。同伴大隈伯を訪ふて、

昨今の場合ニ処する私案を伯ニ陳べ、明日増田を伯邸ニ招き、増田を大橋新太郎へ遣はし、伯之意見を通し、三省堂を救済するの道を講することの伯の同意を得て参校事務を見、帰宅「九三〇」後、為替入高橋義彦為替入之書状を接手す。星野恒より来書あり。訪問の上云々の依頼を受く。薄暮四谷平山堂を訪ふて、書簡若干を購ふてかへる。表具屋ニ托したる奥平居正の三幅対、外同人一幅并書簡二軸出来。久須美秀三郎ニ書を投す。賀田直治より、長女登上京之件ニ付、内密来書あり。

#### 十四日

昨夜来の雨、霽る。広田、書画を贖「九三〇」らし来る。表具屋へ五十円渡す。二、三の表装を依頼す。三省堂一件ニ付、九時より大隈邸ニ到る増田を招き、伯之面前ニ凝議、半日を費し、増田をして大橋ニ交渉を開始するニ決す。登校事務を見る。内田三省、荻野左門、宗家の書状到達。宗家ニ答ふ。越佐会ニ出席、講話を求むる為、長谷川天溪ニ書を与ふ。京阪出張中の山田清作より来書

あり。大鳥井弁三より来書あり。「九四〇」

#### 十五日

晴。広田来る。高橋義彦依頼之幅之箱書を省亭、玉章ニ乞ふため、広田を兩人へ遣す。田中唯一郎来訪。吉田半迂近刻、三條公の印を見さる。薄田貞敬、明治太平記の件ニ付来話。石塚三郎より生鮭舌尾贈らる。万屋ニ不用書籍若干を売却す。平山堂を訪ふて、書画代二十六円払都府楼瓦研一、汪棟画帖を購ふ。夜来雨あり。「九四〇」

#### 十六日

晴。種村、菊屋、校友坂入準三、文明協会事務員池島賢造来訪あり。入谷の宗家ニ電話を以つて、主人ニ面会をもとむ。午後出会を約す。午後、平山堂を訪ふて、天平経一帖借受帰へる。宗家主人と神田の金清楼ニ会す。杉山茂吉来訪。

#### 十七日

晴。日曜。辻川武之進紹介にて、佐藤某来る。斉藤精輔、三省堂「九五〇」爾後の経過を報告のため来る。小柳善四郎、藤本慶祐来る。藤本より物を贈らる。午時英堂と会

す。余より囑したる二顆の印成る。

十八日

晴。早朝前島男を訪ふて、多時談話。宗家継志園碑の篆額揮毫を依頼す。寺崎広業方へ立寄り、其の近作と、近購之印を観る。午後登校、有賀長雄<sup>（九五ウ）</sup>と大隈伯外交大勢史編輯進行上の打合を為す。又、吉田東伍と倒叙国史の件ニ付協議し、去つて波多野精一を訪ふて、星野恒より依頼の田中経太郎一身上の件ニ付相談して帰宅。五時頃坂口五峰来訪あり。新潟県会議員進歩派ニ三人の無資格者を出さんとするニ付云々の相談を受く。夜に入り置酒。幅函五、六題署をたのむ。夜来大雨あり。<sup>（九六オ）</sup>

十九日

雨。菊屋、半迂、大工佐藤吉五郎、大杉栄交々来る。増田より三省事件ニ付、大橋新太郎と相談の顛末を、電話にて通知あり。星野翁ニ書を発す。登校事務を見る。在台湾宜蘭女婿重栖健、初めて来り見る。長女の失態より、妻女婿を見るを欲せず。賀田之書を齎らし、内密来り余

を訪ふ也。余は延見<sup>（マ）</sup>多時、家史を語りたる後、学校を案内し、終つて<sup>（九六ウ）</sup>青陽楼ニ伴ひ、飲食を与にし家事上之事、并ニ重栖将来之立志方針等ニ付、説く所あり。八時頃別る。坂巻登介より来書あり。

以下別冊ニ

ツ、ク

大正元年十一月下流起筆  
同二年 月 二至ル

特別イ4  
1919  
560

## 双魚堂日誌

雙魚堂起居注

大正元年十一月二十日以降

（方陽）

子壬

十一月

二十日

晴。星野恒より返書あり。出版部員太田武之助死去ニ付、浅草清光寺へ葬式ニ臨む。寺崎広業ニ幅箱五為持、箱書を頼む。外出中、広田、半迂等来る。中島半次郎<sup>（二オ）</sup>より、近著独逸教育見聞記を贈らる。謝状を発す。平山堂を訪ふて、二、三の書画を得、不用品若干、価の内へ

遣す。増田を訪ふて、家屋建築ニ付、金融を依頼す。今夜、有楽座ニ開催の文芸協会劇を見る。バルナード・ショーの二十世紀を演ず。今夕満員。

二十一日

晴。広田、菊屋、半迂、坂口五峰、田中唯一郎交々来訪。学長宅<sup>（二ウ）</sup>種村、小久江と会して、大隈伯大勢史出版経画、其他の件を協議し、午後より大隈邸ニ抵り、大勢史編纂会ニ臨み、書名を大勢開国史と定む。東曆鑑定の件ニ付、大口鯛ニ書を投ず。

二十二日

雨。坂入準三来訪。物を贈らる。坂口仁一郎、大島井弁三、種村宗八来訪。貯蔵銀行手形期限ニ付、岡本季三裏書之分、六十日間手形、更<sup>（二オ）</sup>らに差入。田中唯裏書之分、九十日間期限として三百円増額、千二百円之手形差入。追担保日清生命株十株差入。坂口、今夕帰国ニ付、高橋義彦依托之掛物二幅托す。継志園篆額の下書用紙、前島男へ送り、揮毫を依頼す。午後より、増田を実業日本ニ訪、金融談を為し、八百円手形裏書を頼み、丁酉銀

行ニ抵り、金円請取。期限来年一月廿日也。去つて、坂口仁一郎を樋口屋ニ訪<sup>ニ</sup>訪<sup>ニ</sup>訪<sup>ニ</sup>ふて話す。五時、小石川原町増田義一ニ新築祝ニ同人と共に招かれ行き、九時過帰へる。小倉鎮之助母の訃ニ接す。

二十三日

雨、後晴。祭日休業。朝起、二、三の書状を發す。広田、菊屋来る。平山堂を訪ふて書画を觀、四谷ニ嘯して、青山ニ赴き、小倉鎮之助母の葬儀ニ列す。香典五円遣す。高木方ニ回り、薄暮帰宅。又、江戸川<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>清風亭開催之越佐会ニ臨む。京都下村より大隈伯京都ニ遊ふと云ふ説の實否を、電報にて照会し来る。今夜、家族有樂座見物にゆく。

廿四日

雨、霽。日曜。表具屋ニ孤村文珠幅表装を托し、勘定之内二十円払。英堂と会す。平山堂ニ立寄、樂翁書簡の額面を購ふてかへる。代金相済<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>。

廿五日

曇。広田金松、菊屋、朝鮮の赤星交々来る。赤星より、

個注文す。青柳篤恒ニ書を与<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>。

廿八日

晴。山崎直三、小林堅三来訪、長時間図書館の件ニ付協議す。種村来訪。寺崎広業ニ依頼之幅箱箱書出来。平山堂を訪ふて、三藐院色紙十二枚を購ふ。代金十五円払。三河屋ニ飯して、登校。河上淳一郎より来書あり。北越新報より、学校へ五百円寄付の件を報し来る。直ニ礼状を發す。<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>。桂五十郎ニ書を投す。杉山茂吉来訪。

廿九日

晴。平山堂より頼朝書簡、大燈国師孝經切持参。偶々広田来る。托して今泉雄作ニ鑑定を乞ふ。広田より大江丸反故二枚購ふ。菊屋来る。散策、英堂と会し、筆花生を贈る。梶田半古ニ托し置ける画幅出来。図は、神功皇居と武内なり。<sup>ニ</sup>六<sup>ニ</sup>。山田清作来話。

三十日

晴。下林貞雄、三郎籍の件ニ付、来訪。小久江、印刷会社<sup>ニ</sup>の件ニ付来る。大鳥井弁三、山田清作ニ書を發す。高橋義彦より依頼之幅ニ、鉄道便にて發送。午後登校、事

李朝殿製赤色模様の花瓶を購ふ。二十円払。大工佐藤吉五郎ニ建築費之内、六百六十余円内金として相渡す。契約出来、期限五ヶ月を約す。大口鯛ニより、東廬の墨蹟につき来状あり。平山堂ニ不用書画骨董を持ち込み、若干を勘定の内へ入る。登校、事務を見る。講義録編輯会ニ臨む。<sup>ニ</sup>四<sup>ニ</sup>。加賀幸三来訪。寺崎広業ニ書を發す。吉田東伍親戚、佐伯より物を贈らる。北堂より来状あり。

廿六日

晴。山田清作来り遊蕩之状況を報す。日清印刷会社の重役会ニ臨む。午後登校、事務を見る。今夜、長谷川天溪帰朝を迎ふるため、同人紅葉館ニ会す。平山堂ニ立寄り、茶棚<sup>ニ</sup>四<sup>ニ</sup>一を得、東廬歌之幅并ニ茶棚之為、三十二円払ふ。

廿七日

朝来。菊屋、広田、小池素康、大江乙、坪内、頼開交々来る。十時客を謝し、昂同伴、落合村宅地ニ抵り、新築の縄張をなし、去つて神田佐久間町迄大工同伴木材を見てかへる。昨夜不眠のため疲労を覚ふ。表具屋ニ幅箱四

務を見る。在京都赤堀又二郎より、消息あり。継志園記ニ付、宗家へ書状を發す。再び得たる荷田春満詠草の鑑定を求むる為、使を大口鯛二方へ<sup>ニ</sup>六<sup>ニ</sup>遣す。長岡の広井ニ書を投す。

十二月

一日

晴、日曜。大鳥井より金子入書状来る。表具屋ニ托したる幅箱四、書翰卷四、修繕之分出来。午後昂、盈同伴落合村ニ抵る。今日家作水入を為す。検分の後、杉山茂吉方<sup>ニ</sup>七<sup>ニ</sup>へ立寄、去つて四谷ニ下車、三河屋ニ飯し児等を先きにかへし平山堂ニ立寄、二、三の物を購ふてかへる。不在中藤井忠次郎来訪。

二日

晴。早朝、星野翁来訪。縁談ニ関する云々の依頼を受く。広田金松、吉田半迂、藤井忠次郎、薄田貞敬交々来訪。午後より登校、事を処す。大口鯛ニより来書あり。又、広井一の書ニ接す。四<sup>ニ</sup>七<sup>ニ</sup>。谷平山堂ニ到り大燈国師の

孝経切一幅を購ふ。代りに探幽の茄子の茶箱と金若干払ふ。夜に入る迄骨董を觀。乾隆端墨一、印五、六顆、浮田一恵作香合を購ふ。三河屋ニ晚餐をしたゝめ、坪内方ニ抵り文芸協会の幹事会ニ臨み十時帰宅。宗家より使來り物を贈らる。園碑潤筆料六十円請取。

三日

（一八〇）

晴。大橋新太郎より八日、自邸へ案内状来る。小久江、種村、高田俊雄來訪。出版部來年度の経営を協議す。神樂江巻石來り近作を贈らる。校友浦野元俊來る。午後有賀長雄と共に史料編纂所ニ至り、開国大勢史ニ載すべき絵画の材料を選択す。終つて和田万吉を図書館ニ訪ふて歸へる。

四日

（一八一）

晴。早朝増田義一を訪ふて、日清印刷会社の取締役を受けんことを交渉、長時間談合、承諾を得てかへる。広田、本田信教、山田清作來る。桂湖村來訪、余より囑したる繼志園碑陰の記文章稿を齎らし示さる。午餐を共にして別る。午後、学校理事会ニ臨み維持員会、管理委員会ニ

提出の案ニ付協議す。三時より矢來俱樂部ニ出版部社員会を開らき、本年の収支を報告し配当を（一九〇）決す。又、來年度の経画ニ付協議す。本日、落合村の家屋上棟式を行ふ。最、喜代四式ニ臨む。繼志園記の揮毫を日高秩父ニ托す。

五日

晴。菊屋、種村、安田恭吾等交々來る。大鳥井、文明協会の件ニ付長時間談す。日清印刷会社の重役会ニ臨む。高橋義彦より來書あり。午後、平山堂を訪ふて半日書画を（一九〇）検し、若干の幅を借り受けかへる。勘定之内へ三十円払入。

六日

晴。書画数幅鑑定をもとむる為、桂湖村方へ為持遣る。高田を訪ふて年末出版部より金融の事を協議す。登校、午後より維持員会を開く。四時より会議室ニ図書館商議員会を開き、規則の改正、圖書之選定、図書費の増額等ニ就き協議し、夜に入り散会。（一九〇）外出中三省堂の神保周蔵來訪。坪川頼閑の書到る。

七日

雪天。吉田東伍來話。表具屋より雲華二、林檎宇、茶溪玄々、孤村六幅表装出來ニ付持參。更らに大江丸のマクリ表装頼む。広田來る。勘定払。煤仙の墨購ふ。登校、午後より恩賜館内ニ基金管理委員会を開く。薄暮帰宅。松本胤（二〇〇）恭より大雅の手本を為持來る。

八日

風、晴。広田金松來る。四谷平山堂を訪ふて平金華詩幅、蒔絵中次を購ふ。三河屋ニ飯し歸途表具屋ニ立寄、淡窓の幅表装を托す。金三十五円勘定内へ払ふ。不在中、竹村良貞、通信株式の件ニ付來訪。北堂へ例年の如く金十円郵送。石沢兵吾より來書（二〇一）あり。内田貢、加賀幸三、琳琅閣、村口書店ニ書を投す。今夜大橋新太郎ニ招かれ番町の邸ニ到り、其饗応を受け、夜に入り帰宅。新潟坂口仁一郎より來電あり。明朝着京を報し來る。

九日

晴。大隈伯より日蘭協会ニ付案内状来る。内田不知庵より返簡來る。商科講議編纂の件ニ付、主任渡辺、高田俊、

種村來る。坂口五峰來（二〇二）訪、午餐を共にして別る。

午後、平山堂を訪ふて夜に入る迄骨董、書画を見、五、六点購、百円払。村口書店ニ書物代三十五円払済。

十日

晴、風。山田清作來る。琳琅閣へ残金の内五十円払。松本胤恭より來書あり。預り品為持かへす。午後登校、生麦宗家別邸へ書状を發す。萩野左門ニ書を投す。大隈邸ニ（二〇三）日蘭協会發起会あり、出席す。蘭国の公使外四、五蘭人の出席あり。不在中、市島立志治來る。杉山茂吉來訪。讃州高松之人細溪渙平より木村黙老の反故二、三紙を贈らる。

十一日

晴。早朝、内田不知庵來る。近かく出版せんとする国史、外交史ニ付、意匠其他の事を協議す。広田來り書画を示す。東儀（二〇四）季治、関屋親次來年度文芸協会之予算を協議して去る。市村瓊次郎、松本胤恭を訪ふ、不在。平山堂を訪ふて時間を費し、四時頃湖畔ニ英堂と会す。夜に入り帰宅。大工佐藤吉五郎來り三百円の入金を請ふ。

十三日渡す事を約してかへす。

十二日

晴。星野翁依囑之件ニ付、市村瓊「(一三オ)」次郎を若松町ニ訪ふて話す。高田方ニ出版部幹部会を開き、来春出版の倒叙国史、開国大勢史ニ付経営上の協議を為す。午後ニ至るも終ニ決せず。二時より下谷金杉の宗家宅を訪ふて、夜に入り帰宅。藤井忠次郎より雉子を贈らる。毛利并ニ其姉よりこのわた外ニ物を贈らる。

十三日

風。高松市田町細溪渙平より牧「(一三ウ)」野静斎を介し、木村黙老之草稿を贈られたるニ付、謝状を發す。種村、広田来る。大工吉五郎ニ内金三百円也相渡す。真島桂次郎より塩引を贈らる。松本胤恭ニ書を發す。風邪にて終日家居。星野翁ニ書状を發す。本家より来書あり、直ニ答ふ。

十四日

晴。風邪未愈す。菊屋、半迂、渡辺幾次郎来訪。真島へ礼状を「(一四オ)」發す。宗家へ雪花墨を贈る。松本胤恭へ

書簡預り物返却。午後、客を謝して臥す。出版部より歳

暮として金五百円贈り来る。西条丹呉より塩引を贈らる。

山田清作来訪。平山堂より骨董数点取寄せ、枕頭ニ置き悶を遣る。薄暮種村来訪。過般、西園寺内閣辞後久しく行悩みたる後継内閣、愈々桂を起たしむるに決したる旨号外出つ。「(一四ウ)」

十五日

休日、昨夜来漸く雨を得たり。風邪未愈へす。星野恒より来書あり。広田、司馬江漢筆魚藍觀音一幅を持ち来り見さる。食指動く、今泉ニ鑑定を乞ふて購否を決せんとす。小林堅三来り、館務を協議して去る。午後より多少の発熱あり。平臥夜に入る。丹呉へ鮭の礼状を發す。

十六日

雨霽る。広田来る。江漢幅今泉ニ鑑定を求めたる処、江漢より前のものと審定ニ付、買入見合す。今日未だ風邪之気味なれとも勇を鼓して外出。英堂と湖畔ニ会し金と物を贈る。高木を訪ふて青毛氈を購ひ、帰宅後更らに平山堂ニ至り尚信梅月、沢庵賛の幅を購ふ。勘定之内へ五

十三円払。杉山来診。新潟坂口より味噌を贈らる。

十七日

「(一五ウ)」

晴。咳嗽未やまず。関節痛みを覚ふ。朝餐後臥す。前島男へ継志園篆額揮毫之礼を申おくる。賀田直治、赤塚啓作より物を贈る旨来書あり。梅沢和軒来る。謝して遇はず。吉田半迂、本田信教、橘静二等来る。平山堂へ昨夜持参の品購入見合為持遣る。内田貢方へ倒叙国史草稿を為持遣る。広告案を作らしめん為也。三省堂の坂巻登介ニ書を投す。桂五十郎ニ書を發して継「(一六オ)」志園碑陰の文稿を促す。年末家計上之都合により出版部より金五百円也借入。来年度所得分を以つて返金之事。旗野襄織ニ簡して和泉信平の病況を報し、月並金を督促す。晩間杉山来診。歳暮数個小包郵便ニ托し郷里へ發送す。

十八日

晴。感冒未愈へす。尚蓐中に在り。菊屋より文守国師の書簡を購ふ。斎「(一六ウ)」藤精輔来訪。三省堂整理の仕末を報して去る。藤井忠次郎来訪。青柳篤恒来話。賀田直治へ書状を發す。夜来雨あり。

十九日

払曉豪雨あり。江部淳夫より来書あり。表具屋より淡窓、大江丸の幅出来、とゞける。金十五円也勘定の内へ払。明治商業銀行へ式百五十円也預け入る。江部ニ復す。出京中の五峰ニ書を投す。桂「(一七オ)」湖村、赤堀又次郎来訪。午後又臥す。種村宗八来話。坂口五峰、坂巻登介来訪、長時間話して去る。伊原井々園より来書あり。

二十日

曇。感冒を胃して、今朝増田義一を訪ふて、大隈伯大勢史の件ニ付、増田と共同出版の件を協議す。種村を招き事を処す。広田来る。買物代二十円渡す。宗家より来書あり。午後より又臥す。病状「(一七ウ)」格別の事ならされと風氣抜けず。気管支併発、毎々冬期風を引けば長びくを例とし幾んど懊悩ニ堪へず。床上折簡して四方之用を弁す。病客の歳晩、流石ニ多忙也。

二十一日

雪天。感冒未愈へず。小久江成一、中村芳雄、小林堅三、吉田半迂、国田江東外二三の客来る。午後、継志園記を

再度携へて松平康国「(一八オ)」を訪ひ、更らに相談之上、五、六十字省き、文章を縮む。文章漸く佳を覚ふ。二時より日清印刷会社の總會ニ臨む。此度は特ニ会社ニ於て開会、株主ニ工場の設備を觀覽せしめたり。帰宅後園記を淨写して、中村芳雄ニ托し日高秩父ニ致さしむ揮毫を乞ふため也。山崎直三、森山本一來訪。病中大多忙。桑田豐藏、清国へ赴くニ付告別之為来る。平山堂より白石の幅を持参。「(一ハウ)」余の鑑定を求む。在生表宗家主人ニ書状を発す。

#### 二十二日

雨。真島信城より梨菓を贈らる。旗野みのりより和泉の栄餌料式十円送り来る。野田屋を訪ふて饒州香合一購ひ、すべて勘定払済。湖畔ニ英堂と会し二時帰宅。大隈伯新著を実業日本社并ニ早稲田出版部と共同販売ニせんとの余の請求ニ対し、増田より承諾「(一九オ)」の旨報じ来る。小久江成一来る。印刷会社より謝金參百円持ち来る。

#### 二十三日

晴。広田、坂崎坦来る。田原栄来訪。親戚之遺稿森の落

葉を贈らる。新発田新聞新年号ニ余の談話を求め来る。

宗家の継志園の事を話し、筆記せしむ。新潟新聞よりも同様請求あり、国田江東来る。政局談をなし筆録せしむ。石沢兵吾ニ書を発す。在生「(一九ウ)」表宗家ニ掛蓬菜を贈る。又、一書を発す。午後平山堂を訪ふ。得る処なし。

#### 二十四日

晴。宗家より来書あり。内田不知庵を砂土原町ニ訪ふて圖書出版上の件ニ付長時間話す。平山堂を訪ふて時絵の香枕一、対山耕石の聯幅を得。六十五円即納。小森準三より来書あり。新発田新聞へ送るべき談話の稿を校訂す。「(二〇オ)」長岡石塚より餅米二斗を贈らる。杉山来訪。石塚へ礼状を発す。佐藤吉五郎ニ書を発す。

#### 二十五日

晴。団子坂河野、広田来る。種村又来る。学校へ一、二の用件ニ付書状を発す。大鳥井より来書あり。石塚三郎ニ蓬菜掛を送る。書状添へる。宗家へ書を発す。文部省より標準目録追加編纂のカードを送り来る。半迂二七円「(二〇ウ)」歳暮として遣す。シカゴ発樋口清策の絵はかき来

る。終日家居。平山堂より江上外史の漁樵晚帰の幅を取

寄せ壁ニかけて悶を遣る。晩間、吉田東伍来訪、晚餐を共にして話す。寝後倉敷大原孫三郎より幸田露伴、日曜講演ニ出席の約あり。来らぬニ付照会依頼之電報来る。

#### 二十六日

晴。大鳥井并三、文明協会の件「(二一オ)」ニ付来る。小久江成一、紫安新九郎来話。石沢兵吾来訪ニ付、新潟学校創立頃之事を聞き長時間ニ渉る。午餐をともして別る。午後より平山堂ニ到り半日を消す。晩間大工佐藤吉五郎来る。金貳百円也渡す。備中より来電の件ニ付、橘静ニを幸田露伴方へ遣す。倉敷大原より謝電来る。

#### 二十七日

「(二二ウ)」

雪天。広田来り巢兆土佐絵の幅を持来る。西蔵胎内経若干購ふ。校友浦野元俊、履歴書を携帶來訪。小倉鎮之助より物を贈らる。平安竹泉より杯を贈らる。佐藤伊助より鮭卵を贈り来る。薄田貞敬来話。杉山母来る。久入籍の調印を為す。感冒漸く快を覚ふ。理髪を行ふて兎を拉し散策、四谷三河屋ニ飯し夜に入り帰宅。江部淳夫并宗

家より来書あり。「(二三オ)」

#### 二十八日

早朝広田来る。江部淳夫、真島桂次郎より来書あり。平山堂を訪ふて画幅二借り受け、更らに高木を訪ふて袖香炉一、平卓一を購ひ、風月堂ニ飯してかへる。ミゾレ降り出で、さむし。夜半より雨、雪と変し翌朝一、三寸の堆雪を見る。

#### 二十九日

朝来雪やまず。二人曳の車を僦「(二三ウ)」して増田義一を原町ニ訪ふて伯近著、共同編纂の件を協定す。種村、小久江議ニ参す。十一時辞して湖畔ニ英堂と会し食事を共にして三時帰宅。六花紛々たり。石沢兵吾より来書あり。富山房より雑誌原稿謝儀を贈らる。今日朝より家人餅を搗くに忙はし。晩間、昆田文二郎来訪、長時間話して去る。

#### 三十日

「(二三オ)」

晴、積雪堆を為す。広田来る。搦真魚譜二冊、日光山朝鮮国王献納の鐘銘一本購ふ。坂口五峰より佐渡烏賊漬壹



樽を贈らる。野口多内帰朝を報す。吉田半辻来る。正午、  
児女を伴ふて神田辺ニ物を購ふ。宝亭ニ飯してかへる。

三十一日

晴。備中の原澄治より来書あり。明治商業銀行より金百  
円引出す。広田金松来る。表具屋へ托し置け<sup>「(三ウ)」</sup>る  
孤村小幅手簡巻二共ニ出来。星野恒より使来り物を贈ら  
る。又、先頃無心を云ひ置ける塩谷世弘之手簡巻通贈ら  
る。青山宛にて絶筆とも見るべきもの也。直ニ書を裁し  
て謝す。平山堂を訪ふて勘定決済。除夜家庭の宴会例の  
如し。本年は久一人を減し、和泉病臥来り会せず。和泉  
母、妻も和泉方にて年を送り、旁々家内少数。妻は手数  
省けて本年の如き可なる大晦日はなしと云へり。<sup>「(二四オ)」</sup>  
一年終局大要を巻尾ニ記するを例とす。而して本年に  
於ける重なる事紀は双魚堂日載中ニ載せたるを以てこゝ  
に略す。唯たこゝに年末仕払を略記す。

五百円

落合家作内金

五十円

琳琅閣

四十円

表具屋

三十五円

村口書店

二十円

野田屋骨董代

四百円

英堂

四百五十円

平山堂

百円

呉服屋

貳百円

歳末家用

三十五円

落合宅地手入

百円

飯塚払

三十円

広田払

本年歳尾の経済約二千円也

「(二四ウ)」